

8

1994

7.8月合併号

浄土

佐藤雅彦

旅

夏 攸吾

好評連載

吉川英明 利根川 裕 稲葉小太郎

連載講話

高橋富雄

新連載

須藤隆仙

観無量寿経の世界

石上善應



法然上人鑽仰会発行

は
じ
め
に
押
し
て
ね、
0
0
8
8。



ゼロゼロ押したら ハッピーハッピー

0088

日本を楽しくする電話

お申し込み・お問い合わせはお客センターへどうぞ。

30 0088-82 (無料) / 0120-0088-82 (無料)

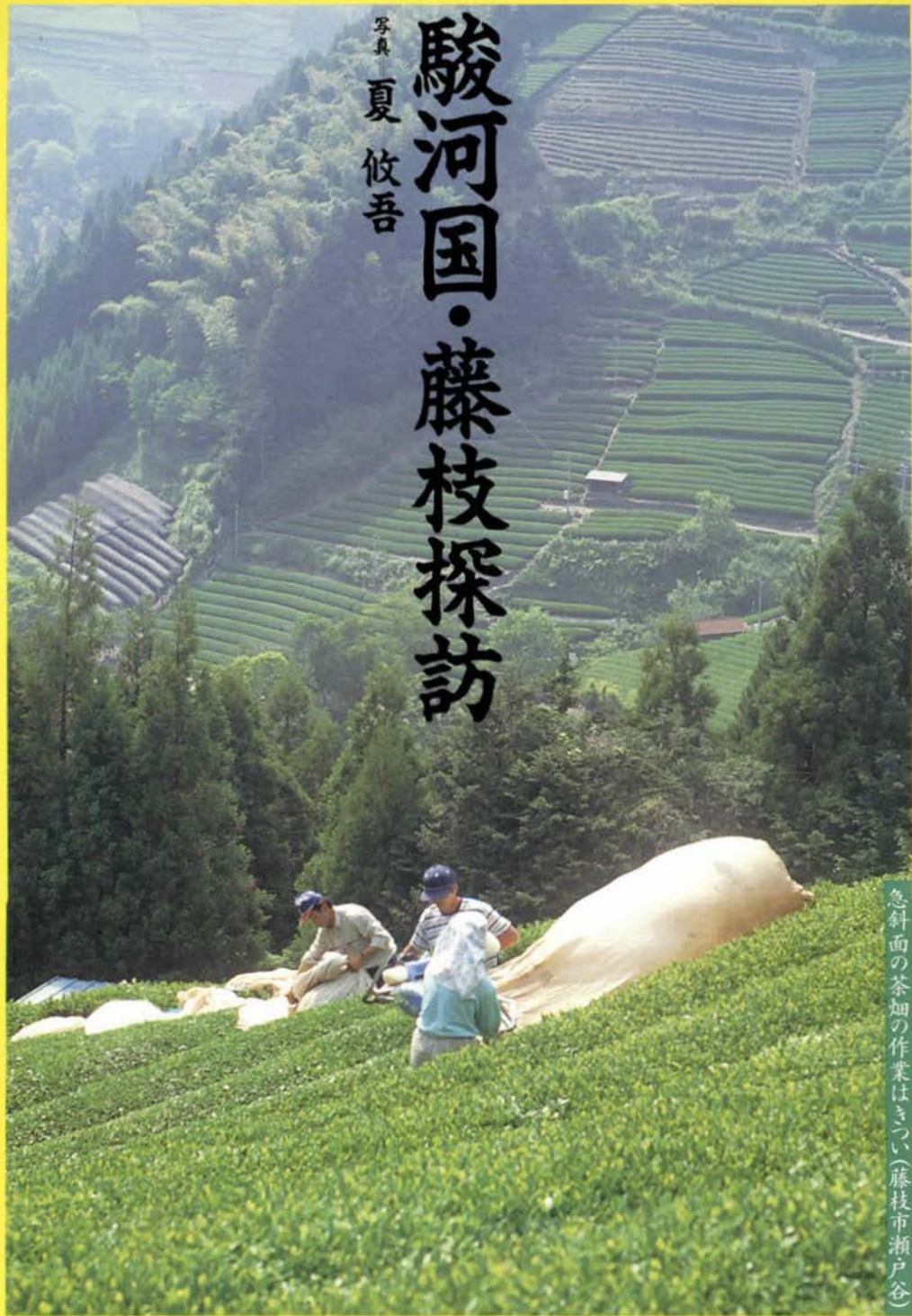
■受付時間 9:00~23:00 (年中無休)

0088なら●月々の基本料金は一切かかりません。こ使用になった通話料金
だけのお支払いです。●かけ方は簡単。現在お使いの電話機で、市外局番
の前に"0088"を押すだけ。●60kmを超える市外電話は0088がおトク。

駿河国・藤枝探訪

写真 夏 彼 吾

急斜面の茶畑の作業はきつい（藤枝市瀬戸谷）

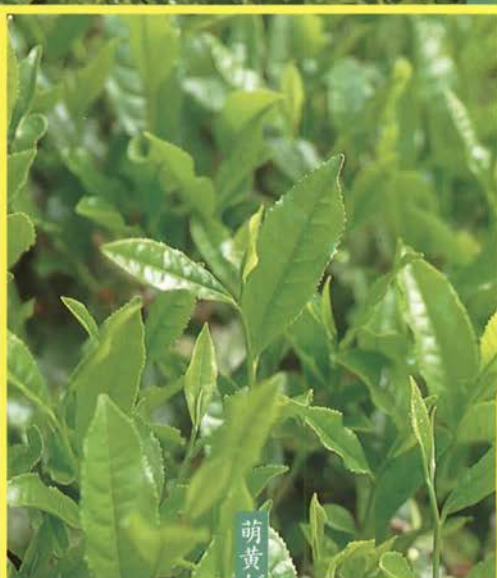




無農薬の一番茶を刈る



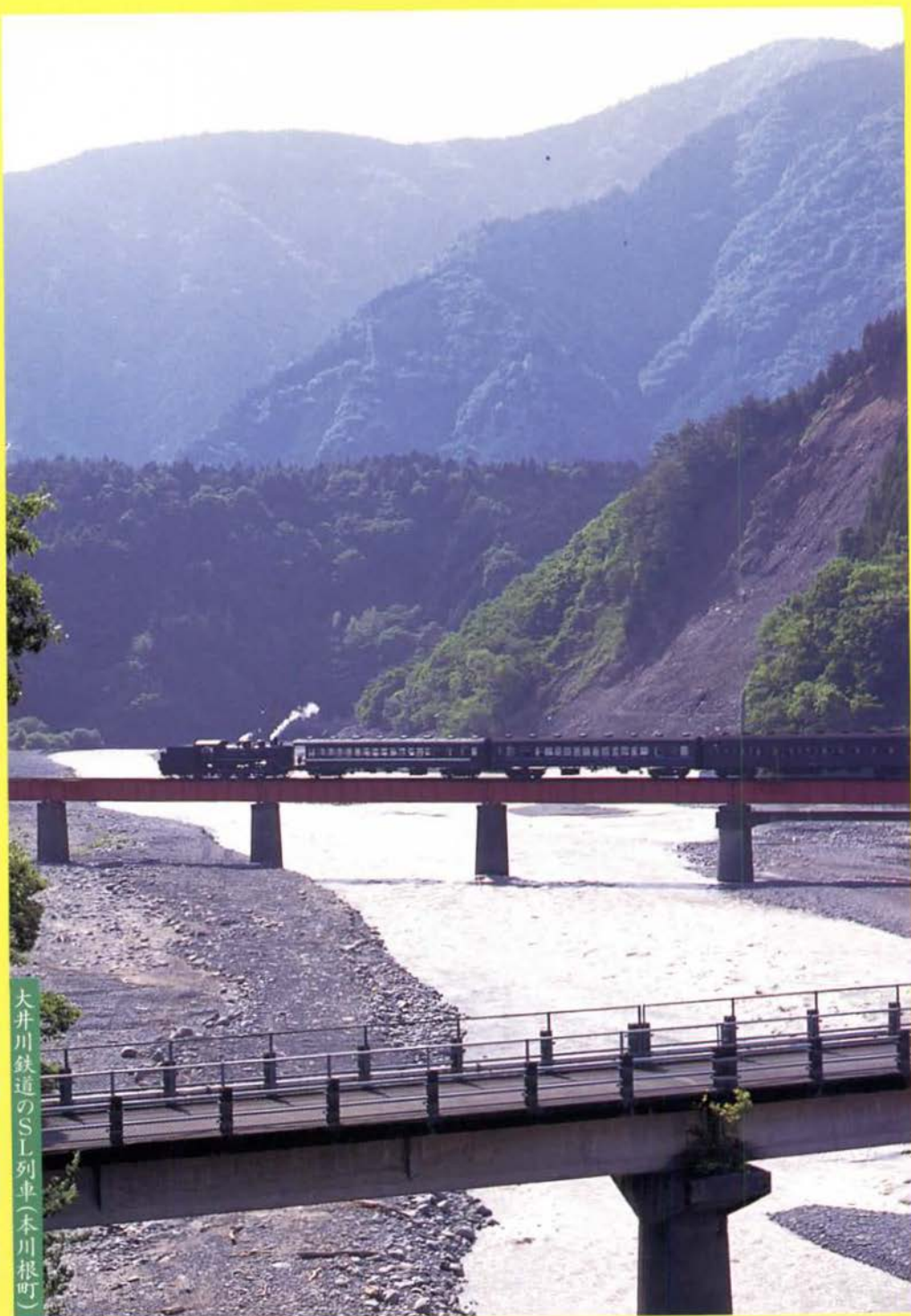
生葉を加工してできる緑茶は約五分の一の量になる



萌黄がかった緑の新茶



純生鯉を養殖するカネイサの増田さん(吉田町)



大井川鉄道のSL列車(本川根町)

浄土



1994/7・8月合併号 目次

[カラー口絵] 駿河国・藤枝探訪……………写真＝夏 攸吾	3
どしゃ降りの初日——私のアメリカ留学記……………佐藤雅彦	8
新茶と純生鰻……………夏 攸吾	16
午後の日差しの中で——⑦	
消え行く言葉(二)……………吉川英明	24
利根川 裕のマイアングル——①	
ひとりよがりの過激教育論……………利根川 裕	32
現代の快僧——その6	
国際救援活動は菩薩行なり……………稲葉小太郎	38
念仏信仰と武士道〈最終回〉……………高橋富雄	50
観無量寿経の世界……………石上善應	60
念仏信仰の系譜——中国編——①……………須藤隆仙	70
編集後記……………	80

表紙題字＝浄土門主 中村康隆貌下

表紙撮影＝松本立夫

目次・編集後記イラストレーション＝田村直巳

どしや降り^がの初日

私のアメリカ留学記

佐藤雅彦



帰国の朝に

あなたに会えて よかった

あなたには 希望^がのにおい^がする

佐藤雅彦（さとうまさひこ）●大正大学総合文化教育研究所研究員 東京都文京区
浄心寺僧侶 一九九一年五月より一九九四年三月末まで、アメリカ・ワシ
ントンDCジョージタウン大学ケネディ倫理研究所へ、浄土宗海外研究生とし
て「生命倫理学」を学びに留学。

「あの鐘を鳴らすのはあなた」という歌のフレ
ーズが自然にゆっくりと口をついて出てきた。

あと数時間後にワシントンを飛び発つ朝、ホテ
ルのバスタブにつかっていた。好きな歌だから

別に意識もせず口ずさんだのかもしれない。しかし、その朝の実感より帰国後三ヶ月が経った今はさらに強く、私の留学を表現するの的を得た光景だと感じている。

九十二年五月末から一年十ヶ月間のアメリカ・ワシントンDCでの留学生活を一言で表現するならば、「会った」になると思う。「生命倫理学の基礎研究」という目的のために、私を受け入れてくれたジョージタウン大学ケネディ倫理研究所での出会いをはじめとして、アメリカでの人間、文化、とりもなおさず毎日の生活すべてが新鮮な出会いにあふれていた。

どしゃ降りの空港から

ワシントンDC・ダレス国際空港は、どしゃ降りだった。これまで仏跡を尋ねて中国やイン

ドを訪れた団体旅行とは異なり、一人きりで飛行機に乗ることも、アジアを離れたいわゆる西洋社会への旅行も初めてのことで、シャトルバスで空港のビルに運び込まれ、入国審査、通関を経て、空港のエントランスが近づくにつれ、緊張の高まりは徐々に増していった。もとより出迎えなどない単身の入国は覚悟のできていることだったが、ショルダーバッグの他に、日本から送った荷物が届くまで一ヶ月近くは生活できるほどの衣類や勉強道具を詰め込んだスーツケースを左右一個ずつ、その荷物の重たさと、降りしきる雨のなか塞がった手で傘もさせない状態に心細さはふくらんでいく。

「TAXI」の標示を手掛かりに荷物を引きずって行く。アメリカのタクシーはイエローキャブといわれ、黄色い色をしているはずだと一人

で勝手に思い込んでいたら、黄色いタクシーはほんの一、二台しか並んでいない。あとはグレーや薄汚れた白が多い。こんな些細なことが「乗っても大丈夫だろうか」と不安を引き起こす要因になってくる。

覚悟を決めて手を上げる。並んでいたうちの角の尖ったようなグレーの大きな一台が私のところまで擦り寄ってくる。ちょうど私のからだの真ん前に後部右のドアが停止する。当たり前のように私はドアの開くのを待っていた。十秒くらいでタクシーは自動ドアでないことに気がついた。それも日本では常識のように心得ていたことなのに。誰に笑われるわけではないが、気恥ずかしい思いをし運転手に声をかける。「トランクを開けてくれないか？」と言うのを聞いて、四十代半ばの身長百八センチ以上ある黒

人の運転手は、車からけだるそうに降りてきてスツケースを積み込むのに手を貸してくれた。

「ジョージタウン大学のケネディ研究所へ」行く先を告げると、運転手は車を動かした。空港のサテライトを出て、いよいよ高速道路をワシントンの街へと向かった。大学まで三十分ほどの時間、雨はいくども激しさを加え、運転手はその度にワイパーを速いスピードに調節して雨足を凌いでいた。首都ワシントンの空港とはいえ、道路の両脇は五月の新緑が雨に揺れ、田園都市の中を走っているような気すらした。

高速を右に降りて二階建てのタウンハウスが立ち並ぶ街に接し、すぐ大きな川（ポトマック川）を渡って右手に芝の斜面。確かにジョージタウン大学という看板が見つけられる。バスケ

ットの大学リーグの勝敗表と予定表もかかっている。なだらかなスロープを昇ると高速道路の料金所のようなゲートハウスがあり、そこで運転手はケネディ研究所の場所を尋ねてくれている。それから数分の後、どうやら研究所に着いたらしい。

運転手に「ここだ」と言って教えられなければ、絶対見逃してしまうほどのこじんまりした二階建ての建物だ。しかし驚くべきことは、看板がないのだ。「ケネディ研究所」という。数段昇ったレンガの階段の先にあるさして重みのない扉の上に、住居表示の番号が白い文字でわかりやすく取り付けられているだけだ。一目見れば、ここが今夜泊まるゲストハウスではないことはすぐわかる。ゲストハウスが離れたところだとなわなわと思ひ、運転手にちよつと待

っていてくれるよう頼み、タクシーを降りた。ゲストハウスの所在とこれから世話になる研究所だから挨拶だけでもしようと思ひ、ドアを押し開けて研究所の中に入ろうとする。

しかし、ドアが開かない。鍵が締まっているのだ。なぜ？しばらく考えて、なるほど今日は土曜日だからだと納得しようとする。時間はすでに土曜日の午後二時を過ぎていた。一度は額きかけたものの、冷静に考えればやはり私の疑問の方が的を射ているように思える。なぜなら、明日の日曜日の午後四時くらいから世界三十数ヶ国の人々が参加して行なわれる国際バイオエシックス・セミナーがこの研究所で催されるのだ。私のように一日前に到着する人だって他にもいるだろう、なのに、研究所の人が誰もいないなんて信じられない。私は建物の周囲をグル

グルと歩き回り、私の質問に答えてくれる誰かがいないかと探し求めた。すでにタクシーを待たせて十数分は経過しただろう。運転手も私の行動に不信を感じ始めたようだ。クラクションを鳴らしている。荷物はすべて乗せてあるし料金もまだ払っていないのだから、おいて行かれるはずはないと、鉄格子のある明かりのついてある窓に向かって人影を求めた。すると中からガードマンの制服を着た黒人の大男がドアを開けて出てきた。私は、明日からの国際セミナーに参加するためにやってきたが、ゲストハウスがどこかわからないと片言で喋り、好ましい返事を求めた。

「君はIDカードを持っているか？」ガードマンは私に尋ねた。アメリカがID社会といわれ、何処に行ってもIDカードと呼ばれる身分証明

を携帯しなければならないことは知っていた。私は慌ててパスポートを広げてみせると、それではなく大学のものを見せろという。

「そんなバカな！いま着いたばかりで、大学のIDなど持っているはずがないじゃないか」まくし立てるように抗議したが、頭と口が空回りしている。

「ところで明日からのセミナーのためのゲストハウスはどこにあるのですか？」私は肝心な質問に切り替える。

「私は知らないし、私の関知するところじゃない。」その言葉には、なるほどこれがアメリカか、と思って溜め息をつく。人伝の話に、デパートへ買い物に行って、一階の化粧品売り場の店員に「紳士服は何階で売っていますか？」と尋ねても、「私は知らない」という答えが返ってくると

聞いたことがある。化粧品売り場の店員は化粧品を売ることを仕事にしているのだから、同じデパートに勤めていても自分の役割分担以外のことは関知しないという態度には、その後の生活でも何度か遭遇することがあった。渋谷とタクシーに戻って、運転手に事の顛末を説明する。

「この大学のゲストハウスを知りませんか？」
彼に尋ねると、

「ああ、知っているよ。この裏側にあるよ」と運転手。私はただ呆然として、

「ほんとうに。そこへ連れて行ってください」

確かに私は運転手に空港から「ケネディ研究所へ」とは言ったが、「ゲストハウスへ」とは言わなかった。緊張の糸がほぐれるような感じがして安心してシートにもたれかかった。大学のキャンパスを一回りするように走って五分ほど

で、レンガ造りの五階建てのビルに着いた。

どっに行けばいいの？

車寄せにビニールシートが覆われたエントランスの正面には、六、七台のタクシーが客待ちをしている。私の乗っていた車の運転手が荷物を降ろし始めるや否や、ドアマンが手伝いにきて、中に引き入れていく。通った入り口こそ小さいがそこにはシャンデリアがあり、赤い絨毯が敷き詰められ、まさにホテルのフロントそのものだった。

つかつかとフロントデスクに歩み寄り、ケネディ研究所にきたこと、明日からのセミナーに参加することを順序よく告げ、「マサヒコ サトウ」の名前で研究所に予約をしてある旨を述べた。愛想よく微笑みながらフロントデスクは

宿泊名簿をチェックし始めた。作業を止めたスラッとした白人の女性は遠慮なしに、

「あなたの名前は、このゲストハウスにはありません」一度は止みかけた心の中の不安の雨が、またザアザアと降り始めたように感じた。

「私はいったい、どこに行けばいいのですか？」
普段から自分の性格は減多にイライラしないことを長所と思っていたが、さすがにアメリカ入国初日からこの様子で、嚴重に抗議するような強い口調で尋ねた。大きな声を出しかかった自分が恥ずかしかった。しかし、研究所のガードマンとは違って、「ケネディ研究所のセミナーです。少々お待ちください」と言っ、どこかに電話をして問い合わせてくれている。

「サトウさん、あなたの宿舎は、ヴィレッジC」といって、こちらのほうになります」と、略図

を指し示して説明してくれる。

「その荷物では大変だから、そこからタクシーに乗ってヴィレッジCと告げれば行けるはずですよ」その親切な応対を信じたものの、また名前がないのではないかという不安が頭をもたげて来る。私は「サンキュー」をいって、タクシーにまた乗る。

初めての夜

ヴィレッジCに名前はあった。しかし、先ほどのゲストハウスとだいぶ様子が違う。第一、私の名前を探してくれたフロントらしき部屋（雑然とした事務室）にいる青年のGパンには穴が開いている。でもそこでドイツからやってきた参加者にも会い、ひと安心は得られた。廊下も掲示板も、まるで大学の校舎の中のような。八

階の私の部屋までエレベーターで上がる。一枚板のようなドアに鍵を差し込み開ければ、ツーンとくるペンキの匂い。二段ベッドに頑丈そうな勉強机が二つ。何日かしてわかったことだが、そこは学生の寮だったのだ。アメリカの多くの大学は寮制になっていて、六月から八月後半までの夏休み期間中は、学生はすべての荷物を持参して寮を退出しなければならない。何故ならその期間中に部屋をきれいに塗り替えて、今回の私たちのような夏の特別セミナー等の参加者のために使うというなんとも合理的にできているのだ。

窓際に立って表を見れば、グラウンドが見下ろせていい眺めだ。振り返って室内を見ればベッドに、枕もない、シーツもない、毛布も何にもない。今一度階下の受付けをした部屋へ行き寝

具が欲しいというと、地図を書いてくれてここへ行けば借りられると言う。早速寝具を借り受けて、部屋に戻って荷物の整理を始める。もう五時近かったろうか。すると今度は、天井に明かりがないのに気付く。案の定、おたおたしていると暗くなり始まる。どうやら勉強のためのライトや必要以上の明かるさを求める人は、自分で調達しなければならないようだ。電気の国アメリカが、薄暗いなんて。いささか呆れることの多い一日に思いっきり大きな溜め息をついて、ベッドに大の字にひっくり返る。

時差の加減もあったのだろうが、毛布も掛けず、パジャマにも着替えず、そのまま翌朝八時まで延々十四時間ほど眠り続けた。まさにそれは眠るというよりは眠りに落ち込んだという、アメリカ初めての夜だった。

新茶と純生鰻

文と写真 夏 攸吾



「藤枝無農薬茶の会」生産者代表 杵塚さん

「百姓」名乗るまっとうな農民

車窓に富士を迎え、見送って、駿河路……といえはこの時季、当然茶の話になる。

藤枝市の山間部、道幅がだんだん狭

くなって北郊の瀬戸谷せとやというところに、私は「藤枝無農薬茶の会」生産者代表、杵塚さんのお宅を訪ねた。傍を川が流れる、のどかな山里。

杵塚さんとは、「百姓になる」宣言をした我が若き友の結婚披露宴で、はじめて逢った。

「百姓」、この言葉にはかつて差別の響きがあった。しかしいまは、進歩的な農民たちが意識して自ら「百姓」を名乗る。そんな杵塚さんから、「無農薬



茶葉の育ち具合を見る

の茶」といわれて私はドキツとした。知らなかった……。

まっとうなものを食いたい。だから穀物や野菜、果実には気を配ってきたのに、木の葉っぱにまでは想いが及ばなかった。お茶よりお酒ちちという、個人的な嗜好のせい……では、済なまされない。葉を煎じて飲む、茶に農薬が染み出していたなんて、迂闊うかつにも気づかずだった分、余計に怖かった。

杵塚さんの無農薬有機農法は、「田畑を荒廃させる化学肥料で作物は作るが、土を育てない、耕さない農業」への反省、「怖いと知りながら農薬を大量に振り撒く百姓、それを指導する農協、農政」への疑問から始まっている。まっとうな「百姓」にかえれ。

だが、いまから十九年も前、無農薬有機農法にきりかえた当初二―三年は、「おもしろいように害虫がわいて、無茶苦茶だった」という。周りの茶畑から非難の声を浴び、なにより虫食いだらけの葉は、てんで茶にならなかった。

茫然となりながら、しかし、杵塚さんは支援してくれる消費者グループに、あえてこの「虫食い茶」を送って飲んでもらった。第一歩の記念として……。

そうして四年、五年とたつうちに、自然はよくしたもので害になる虫が生きれば、天敵となるテントウムシやクモなどの益虫も生きる。摂理にかなったバランスがとれて、葉の被害が減っていった。「まともなお茶」、そして「いとお茶」ができるようになり、「あの

若き茶農家、
敷崎さん夫妻

(左右)



ときのはほんと、ひどかったねえ」と
最初の「虫食い茶」を想い出話として
笑えるときが、いまはきている。

丹精した無農薬の新茶を淹れていた
だく。やわらかな香りが口福で「うま
い」。だが哀しいかな私はそれ以上、た
とえば酒の味わいを云々するほどの識
別力をもたず、そのうまさが無農薬ゆ
えなのかどうかもわからない。「よほ
ど飲みなれた人でないと、それは無理
ですよ」と慰められた。

やはり、茶畑を見せてもらうしかな
い。だから私は、そのつものの身支度
をしてきていた。摘んでもみなけりや、
わかるまい。杵塚さんは、そのへんち
やんと観ていたようだ。昼食のあと、
「じゃ、いってみましょうか」といつ

た。

小型トラックで山峡やまがきの道を行く。こ
のあたり平地は少なく、「茶畑くらい
にしかない」斜面がつづく。しか
し、私が連れていかれた茶畑は、なか
でもかなりの斜面にあった。なにしろ
車も入らない、ミカン山で見かけるよ
うな跨座式簡易モノレールでよじ登る
のだ。

雑木林を切り拓いた急斜面の茶畑、
呆れて見上げる私に、「葉の育ち具合
によつて、刈る順番があるんでね」と
杵塚さんはいう。

ふつう二・五人くらいの労働力の、
茶農家一軒で管理できる面積は一町歩
くらい。杵塚さんの場合は、応援の人
手も頼みながら倍近くをこなしている



無農薬の茶畑と純生鰻の露地池

そうだ。一日の労働時間約十時間、年間五十日くらいの休みを夏になるべくまとめてとるようにし、海外の茶どころを見学に行く。緑茶が軌道にのった現在は、紅茶と烏龍茶に熱意を燃やしている。

五月中旬。新茶の手摘みはすでに済んで、一番茶の機械摘み。

刈取機は、丸く作る茶の木のカーブに合わせ、弓なりになった自動剪定鋏みたいなもの。これに大黒さんが持つような大きな袋をつける。鋏の前に風を吹きだすノズルが並び、刈り取った葉を袋に送り込む。重さ十五キロくらいありそうなこの刈取機を、二人で支

え持って新しく芽生えた葉だけを刈り込んでいくのだ。習うより馴れろ、の実践が始まる。

たかが葉っぱ、されど、積もればズシリと重い。一畝刈り終えるたびに、袋を換える。時折、リードする杵塚さんの片手が上に、下に、ひらひらする。もすこし上げて、下げて……の合図に、懸命に合わせる。日ごろ運動不足の体がたちまち悲鳴をあげ、筋肉がこわばり、骨がきしむ。ようやく馴れてコツらしいものをつかみ、安心しかけると、やわらかい土に足をとられる。

そう、無農薬有機肥料の畑の土は、雑木林の落葉の上を歩くようにやわらかい。あつたかくて、いい匂いがする。萌黄がかった茶の若葉が艶やかに美し



い。この時期に備えて雑草は刈られている（除草剤で枯らすのではない）、それでも雑草は伸びる。とくに相性がいいのが、山芋の蔓に勢いがある。雑草

が茶に混じらないように、抜き取りながらの作業。茶畑に鳥がうたい、蝶が舞う。

昼休みに、農薬と化学肥料で作るよその茶畑を見せてもらった。茶葉の緑に生彩うすく、土は死んだように固く、いかにも不健康なのが、比べて見るとよくわかる。「年に十四～十五回は農薬を撒くでしょう」、それでも害虫がついていた。「いまじゃ無農薬の畑のほうが害虫は少ない」と杵塚さんはいう。その日と翌日一日かけて、私は杵塚さんと約一・五トンの茶を収穫した。はつきりいって、これだけの体験は半端じゃない。

その私実感という。作物は土が育てる、その手助けをして、自然の恵



茶畑の中を歩く大井川鉄道のSL列車

みの収穫を得るために、土を耕すのが農業だ。

杵塚さんの「無農薬茶の会」は現在、生産農家十六軒で、総生産高は約五十トン。「農薬や化学肥料を押しつける」農協とは縁をきったから、販売は消費者グループや個人を相手の直販がすべて。入会を希望する後続の生産者もあるが、需要がなければ生産を増やすことはできない。つまり、まっとうな農産の活動は、消費者の支援が育てるのだ。百姓は土、耕すのは消費者……といってもいい。ついでにいえば、いまの流通には悪魔が潜む。

藤枝市の山間部は、南アルプス前衛の山々を目指して奥が深い。車を走らせると、どこまでも茶畑がある。杵塚

さんのところより、さらに急な斜面にも……。 「耕して天にいたる」という言葉が脳裡にこびりつくほどに。

静岡から寸又峡温泉方面を目指す国道に合流、大井川鉄道の千頭駅にでる。折から週末、人気のSL列車に行楽客の歓声。発車時刻を待って終点の金谷駅まで、SL列車を追いかけて行く間も、大井川の兩岸に茶畑が広がる。私は、「農薬を飲みたくはないな」という想いをずっと抱きつづけた。

帰路、思い立って大井川の河口に近い、吉田町に立ち寄る。いうまでもない鰻の産地だが、いまの養殖はほとんどハウス池で合成飼料によるいわば促成飼育。身にしまりなく、うまくないばかりか、臭みがある。そんな鰻は食



いたくない。

私は「純生鰻」を養殖するカネイチに直行する。これは、うまい。身はしっかりとっていて、しかもやわらかい

のだ。

しからば、純生鰻とはなんぞや。露地池でじっくりと生餌なまえで育てる、天然に近い鰻。といっても、別に目新しい試みじゃない、もともとの鰻養殖法への、いわば里帰り。

とりわけ興味深いのは給餌で、冷凍の生鰯を解凍、太い針金に目刺しにし、湯通しして臭みを抜いてから、与える。……と、一斉に群がり寄ってむさぼる、その精気に満ちて旺盛な食欲もさることながら、頭と骨はきれいに残す、いまだきの人間より上手な魚の食い方に感動する。しかも栄養が偏らないように、カツオやサバも与えられる。どう考えたって、粉みたいな餌を食わされた鰻なんかより、はるかにうまいわけ

頭と骨を残して、きれいに
鰻が食べたあとの生鰻



だが……。

食べられるまでに成長するのに、ハ
ウス鰻の六〜七ヵ月に対して、純生鰻
は一年半から二年。この手間を惜しま
ず、白焼き加工販売まで手掛けるカネ
イチの増田さんの、悩みは知名度不足

だ。手掛けはじめてまだ三年目、業界
のこだわり筋にはそのうまさ支持さ
れても、養鰻家二軒では生産量が少な
すぎる。

それでも、こういうよき生産者を、
支持支援して育てていくのが、これか
らの望まれる消費者像というもんだろ
う。

今年、初ものの純生鰻、ほっくりと
豊かな味わいを愉しみながら、私は「偽
物で騒ぐ土用丑の日なんぞ、しゃらく
せえ」と想った。

ヘメモ 藤枝市農民組合「無農薬茶の
会」生産者代表、杵塚敏明（電話）0
54-639-0033、純生鰻「カ
ネイチ」（電話）0548-32-1
55。

午後の日差しの中で

〈第七回〉

消え行く言葉(二)

吉川英明

使われなくなった言葉といえば、私が学生のころ流行った言葉は、今の学生のものとは随分違う。

モク、洋モク、はくい、まぶい、ぎる、がんつける、がんとばす、やさ、やさぐれ、ごろまぐ、あんべら、びりや、きすぐれる……柄の悪い言葉ばかりで、ここに書くのが憚られるが、

私と同年代でも、生真面目な学生生活を送った方なら使わなかったし、知りもしなかったものがあるだろう。

面白くなって、隠語辞典で調べてみたら、案の定、これらの言葉は、ほとんどが「香具師盗賊用語」に分類されている。

そうだろう。私の高校大学時代といえば、昭



和二十年代後半から三十年代前半である。焼け跡の闇市を横行していたテキヤや泥棒の言葉を聞きかじった不良少年（この言葉も今や何とも古めかしい）から、当時の高校生、大学生に流れ込んだ言葉なのだ。

こういう言葉を使って悪ぶっている先輩が格好よく見え、大いに流行ったものだった。

学生達の間で、いつごろからこういう言葉が消えていったのかは知らないが、今の学生の会話を聞いていても、これらの言葉は出てこない。強いて、今でも学生達に使われている「香具師盗賊用語」を探せば、やばい、せこい、ぐらいではなからうか。

しかし、考えてみれば面白いのは、これらの言葉が、学生達に使われなくなったからといって、死んだのではないということである。こう

した隠語は、明治時代からのものも少なくないし、今でも、いわゆる裏の世界では立派に生きている言葉なのだ。

自分達の学生時代に流行った言葉が、表面からは消えながら、脈々と地下水の如く、よからぬ世界に受け継がれていると思うと変な気がする。「香具師盗賊用語」を懐かしんで、青春を思い出す年代がいるというのも、時代と共に変遷する言葉の流行り廃りの面白さだろう。

我々の時代の学生隠語は、出典が明らかだが、転じて、今の学生の言葉を聞くと、その辺がわからないものが多い。

大分前のことだが「シカトする」という表現を初めて聞いて何のことかわからず、娘に訊いたら、無視することだという。

だが、何故そう言うのかと訊いてもわからな

午後の日差しの中で

いという返事である。もちろん、『広辞苑』にも『大辞林』にも、『現代用語の基礎知識』にも『隠語辞典』にも載っていない。大分考えたのだが、今もってわからず、胸に引っ掛かっている。『ださい』という言葉も、最初に聞いた時にはわからなかったが、今や市民権を得たように、新しい『広辞苑』には載っている。だが、今載せてしまつて、すぐに消えてしまつたらどうするのかと、ちよつと心配である。

中学生や高校生が使う『ちやりんこ』という言葉もそうである。

昔は、つまり『香具師盗賊用語』では、ちやりんこというと、子供のスリのことだった。それが、今の学生には、自転車という意味で使われている。

これも『広辞苑』には載っていて、両方の意味が出ている。そして、スリの方は隠語、自転車の方は俗語とあるが、それ以上語源の解説がないので、何故子供のスリが自転車になったのか不明である。この言葉も、自転車の意味は、いずれ消えていくかもしれないが、子供のスリの方は隠語として根強く残るのだろう。

こうした隠語、俗語の流行り廃りは、調べていても興味深いが、最近の話し言葉には、どうもざらざらと神経に障る用語や用法が多い。

見れる、来れる、などの、ら抜き言葉は言うを俟たないが、それ以外にも『……とか』『……のほう』『ちなみに』などの濫用である。

「学校の帰りに、友達トカとお茶トカ飲んで……」
「この間、家でテレビトカ見てたら……」



娘達の会話である。

「友達とお茶飲んで……」「テレビ見てたら……」
でいいじゃないかと、何度もたしなめたものだ
ったが、今はもう諦めた。

一方、

「気になるお天気ノホウは……」

「気になるお値段ノホウは……」

「気になる」と、「のほう」は、テレビの用語
かと思っているとそうでもない。

レストランで、食事をしようと思って座れば、

「お飲み物ノホウは？」

と聴かれるし、帰ろうとすると、

「お会計ノホウは、あちらで……」

と、案内される。

何故、いちいち「のほう」と、余計なものを
つけなければならないのだろう。気にするのは

やめようと思うのだが、その時の虫の居所によつては気に障って、折角の食事までまずくなる。

「ちなみに」という言葉も、テレビの司会者辺りが源だろう。やたらに会話に挟まれると耳に障る。

先日も、ラジオのインタビュアーで、アナウンサーが、質問の中でしきりにこれを使う。

「はあ……人数は、チナミニ、何人ぐらいで？」

「最初にそこへいらつしやつたのは、チナミニ、何年ぐらい前ですか？」

車を運転しながら聞いていると、チナミニばかりが耳について苛々し始め、肝心の中身を聞きそびれてしまうのだ。

これなど、この人の口癖になってしまっているのだろうが、アナウンサーといえばしゃべり

のプロ、自分の癖にも気を遣って欲しいものだ。

「ちなみに」というのは、時々使うと便利な接続詞だが、近ごろは、何気なく書きかけてから、話し言葉での濫用を思い出し、嫌気がさして消してしまう。私にとって、使えない言葉が一つ出来てしまった。

こうした耳障りな言葉は、早く消えていって欲しいと思うが、世の中の常で、この手のものはなかなか消えず、消えて欲しくないものばかりが消えていく。

昔からの地名もそうだ。

東京の、私の周りでも、赤坂、青山、麻布辺りからは、美しい地名がたくさん消えた。

表町、新坂町、氷川町、霞町、筈町、高樹町……

みんな〇〇何丁目になってしまった。

そうなるから、もう大分経つので、尾張町と言って、銀座四丁目とわかる若者もいなくなつた。その方が便利なのかもしれないが、どうも何か殺伐としてしまつた気がしてならない。

ロシアも、共産主義が崩壊したら、随分たくさん町の町が昔の名前に戻つた。

日本でも、町名を昔に戻す運動を、誰かが始めてくれれば賛同するのにな、などと無責任なことを考えている。

土台、名前や物の呼びかたというものは大事なもので、みだりに変えるべきではないと私は思う。

だから、先日朝日新聞の天声人語の一文には首を捻つた。

この日の天声人語は、神戸大学の一海知義名誉教授の「大臣の帰朝」という文章を取り上げ

て、日常使われている古い言葉を、新しい実務的な言葉に改めてはどうかと提案している。

ここに、例として挙げられているのは、大臣、帰朝、納税、登用、天下り、献金などで、例えば、中国では外務大臣を外交部部長と言つているとか、納税は払税、献金は寄付でいいなどと主張している。

しかし、大臣とか帰朝という言葉は、我が国の歴史と風土に根差して使われて来た由緒ある言葉であり、それを部長とか帰国と言ひ直したところで、政治がわかりやすくなるわけでも良くなるわけでもあるまい。

納税を払税と、言いたければ言つたていいが、そう言つたからといって、突然、税法系がすつきりした理想的なものに変身するわけもない。献金を寄付にするというのも同じである。



これらは、別に由緒ある言葉でもないが、折角定着しているものを、わざわざ言い換えるほどのことではないだろう。

天下りなどは別の言葉でもいいが、そもそも、神が地上に降りるといふ本来の意味を、役人の民間への就職という意味にまで広げて使ったのは、新聞が初めてではないか。

名前や呼びかたは、いくら変えても実体は変わらない。

ここを間違えると、行き過ぎた差別語の規制のような言葉狩りになる。言葉は、あくまで、それを使う人の心に拠ると私は思う。

だが、古い言葉を改めると、天声人語が言うならば、朝日は、天声人語というタイトルを改めることから始めたらいい。

天声人語というタイトル、正直言って、私は

大嫌いだである。

天の声を人の言葉で語る……何という傲慢なタイトルだろう。同じような朝刊のコラムである毎日の「余録」や読売の「編集手帳」というさりげないタイトルと比べれば、朝日の傲岸さは際立っている。

このタイトルこそ「新聞は社会の木鐸」であったころの遺物である。今や、新聞は木鐸でも何でもない。

古い言葉を改めると提案した天声人語は、その日のコラムを、

「古い言葉は意識をしばらくかねない」

と結んだが、本当にそう思うなら、尚更である。

天の声と思い込んで記事を書かれたら、金を出して買って読む方が迷惑である。

(作家)

利根川裕のマイアングル

⑪

ひとりよがりの 過激教育論

利根川 裕

何かと教育機関と縁をつなげてきたわたしである。

ところで、教育、と聞いただけで鼻白む人がある。

この鼻白みも、無理はない。まずひと

つ、教育は、タテマエの上で成立しているところがある。

早い話が、ウソも方便、というようなことは、それなりの人生をやりくりしてきた人たちの経験から出た言葉であり、

それだけに生きた人生の裏打ちのある言葉であるが、これを学校教育の場面で、教科書ふうな人生定義としていうことは出来ない。

そこに、教育というものの偽善性を指摘することが出来る。そして、こういうことを指摘したい人生リアリズム派からすれば、教育なんて、まことに鼻白む偽善である。大のおとなだつたら、こんな子供じみた偽善的定義には、とても付き合つていられない。

つぎに、教育というのは、原則的には努力すれば必ず報われる、という樂觀論のうえに成立している。

だから教師はつねに、努力せよ、といいつづける。努力することが悪いことで

はない。それは当たり前である。また、努力することによって、たしかにその努力に応じた成果が現れることもある。

が、努力しても成果の上がないことがある。教育者はまるで努力だけが人生の成功を左右する鍵であるかのようなことをいうが、これはウソである。ウソでない人もいるかもしれないが、大部分の人にとっては、ウソである。

努力しても成績の上がないコもいれば、努力しなくてもいい成績を上げるコがいる。こんなことは、秀才・鈍物を問わず、どんな小学生も身をもって知っていることである。が教育者は、それでも努力の意味と必要を説く。これもウソである。タテマエの偽善である。そんなウソとは、

成績の悪いコほど、もう小学生のうちに
見抜いている。この人生定義を見抜か
ないのは教師である。あるいは、教師はこ
ういう認識をもつてはいけない、だから、絶
対にこの真理を見抜こうとしない。ここ
に教育の偽善性をみる人も多かろう。

そして第三、学校教育での評価と、実
人生での評価とは違う、と思っている人
が多い。じつにイヤなことをいうと、こ
ういう観点は東大出身者には、ほとん
どない。東大出身者たちは、ほとんど自
明の理のように、学校で良く出来たコは、
実人生でも有能な人物であると思ひこん
でいる。有能どころか、人間として値打
ちの高い人間だと思ひこんでいるところ
がある。

が、そんなことのないのは、少し世間
の実態を知った人には、わかりきったこ
とである。

そして、この世では、東大を出た人よ
り、東大を出なかつた人のほうが、はる
かに数が多いから、これらの人たちは、
学校教育の成績がイコール人間能力の評
価につながらないと思ひたがつている。
こういう大多数の人たちは、もし教育と
いうものが東大出身者を頂点とするピラ
ミッドシステムとして成立しているもの
としたら、教育とはなんとウソくさく、
偽善的なタテマエのうえに成立している
ものかと批判的になり、鼻白む。
ことほど左様に、実務的人生を知った
人からは教育には鼻白むような要素があ

る。ウソのシステム。タテマエのシステム。
が、だからといって、わたしは教育は
意味がないものだ、とは思っていない。
ウソのシステム。タテマエのシステムを
主張しつづければ、およそ教育とい
うものは成立しない、と考えているもの
である。

これは、いうならば人生の仮説なので
ある。教育というものは、人間に対して、
ほとんど偽善すれすれの善意のうえで成
り立っているシステムなのである。

ところでわたしは、レイクランド大学
日本校の名譽学長を三年間勤め、この春
に辞任した。

現在、日本にはアメリカの大学が、ほ
ぼ四十校ほど入ってきている。貿易の自
由化ではないが、わたしは原則として、
外国の大学が日本にも進出し、日本の大
学も外国に進出するのはいいことだ、と
思っている。大学の国際的自由競争が、
これが現実的には多くの障壁があつて、
うまくゆかない。アメリカから日本へ進
出してきた大学はいずれも四苦八苦して
いるのが実状である。わたしが辞任した
のも、この苦境を乗り越える手腕がわたし
にないことが、よくわかったからである。
もうひとつ、わたしは数年前から日本
ビジネス専門学校の校長を勤めている。
実務者、実技者を養成する専修学校であ
る。これは、タテマエが優先する教育機関

ではない。何はともあれ、実務、実技の能力をつけるための学校なのであるから。

それはともあれ、学長とか校長を勤めていると、年に何回かは、学生・生徒に演説しなくてはならない。また、教授・教職員にも演説しなくてはならない。

そこで、教授・教職員には、以下のようなことを演説してみたのである。

一つ、学生・生徒を心から愛してもらいたい。学生・生徒を好きになってもらう。彼らとおなじ空間にいて、おなじ時間を過ごすことを楽しいと思ってもらいたい。もし、それが出来なかったら、そうすることがイヤだと思うなら、即刻この学校を辞めていただきたい。人間が人間を好きになること。これがなかったら、およそ教育というものは成り立たない。

二つ、講義・授業をドラマチックにしてみたい。なにも演出上手に芝居がかったものに仕立ててくれというのではないが、六十分なり九十分なり、おなじ空間でおなじ時間を過ごすからには、これが緊張にみちた生き生きとしたものでなくては、生きていることの空費である。

若い知性を好奇心で揺さぶること。若い感性を刺激でふるい立たせること。そして、若いもののちに興奮を与えること。どうしたらそれが出来るかを、本気で考えてもらいたい。好奇心と刺激と興奮が渦巻く空間と時間。それをドラマチックとよんでみたのである。そういう意味で、教

室というのは劇場でなくてはならない。

三つ、とどのつまりは、学生・生徒に自信を与えてもらいたい。自信を持たせるには、なによりも実力をつけてやることである。人間にはおのずから能力の差があるから、みんながみんな、優等生的実力や秀才の実力を持ちえないのは当然である。しかし誰でも自分なりの実力の目標を持っているであらう。それをつけてやることである。「どんな人間にも、ひとつは見どころがある」といったのは勝海舟だが、その見どころを開発し、その見どころを評価し、その見どころで実力をつけることである。

生きてゆく自信を持ちうること。おそらく教育の成果というのは、それに尽き

るであらう。

以上三項が、わたしの演説の要旨であった。わたし自身が、この三項をじゅうぶんに実現しうるかどうかと問われれば、少々たじろがないものでもないが、これが、わたし自身がわたしに言いきかせてきた教師像であることは事実である。

ところで最近、仮称「人生大学」という構想をもってきた人がある。むろん文部省とは関わりのない、おとなの大学である。また、いわゆるカルチャースクールとも違ったものである。まあ、人生とは何かを考える、おとなの大学を作ろうというのである。なんとかこの構想に、カッコをつけてみたい、と思っている。

(作家)

現代の快僧その六

浄土宗 勝楽寺住職

茂田真澄さん

国際救援活動は 菩薩行なり

取材・文 稲葉小太郎

今回ご登場いただく快僧は、浄土宗勝楽寺（東京都町田市）住職の茂田真澄さん。東京浄土宗青年会（浄青）で、十年以上もインドシナ難民やブータンへの国際救援活動に携わり、現在は仏教精神を基本とした超宗派のボランティア・

上げた・ますみ ●1954年東京都生まれ。大正大学卒業。横浜映画放送専門学校（現日本映画学校）中退。1993年4月からスタートした「アーユス」会長。この4月からは東京都町田市の浄土宗勝楽寺の住職となる。「華厳縁起経巻」の中の元曉の「心外に法無し」を座右の銘としている。

ネットワーク「アーユス」仏教国際協力ネットワーク」の理事長である。

仏教とボランティア活動。このふたつはつながりそうで、つながらない、微妙な関係にある。仏教の根本を智慧と慈悲におけば、今の世の中



で第三世界の経済的に貧しい国々の問題を無視して過ごすことはできないだろう。しかし現実には、仏教を背景とするNGO＝Non Government Organization＝非政府組織というのは非常に少ない（海外ではキリスト教やユダヤ教を背景としたNGOが活発な活動をしているのに！）。

もちろん日本の仏教系のNGOとして曹洞宗国際ボランティア会（略称SVA・松永然道会長）や仏教救援センター（略称BAC・伊藤佳通理事長）などがあり、それぞれきわめて貴重な仕事をしている。だが、SVA事務局長の有馬実成さんやBAC事務局長当時の伊藤佳通さんに会って話を聞いた経験からいうと、実際に動いている仏教者は限られたひとたちというのが現状だ。

これはどうしてなのだろう。仏教の教えとボ

ランティア活動や国際救援活動とは、どこか断絶があるのだろうか。仏教精神とこれらの活動は、相容れないものなのだろうか。

もうひとつが関心があるのは、布教との関係だ。仏教者が社会活動すること自体は素晴らしいことなのだが、それを通じて人々のところに信仰が宿ることがなかったら、それは中途半端だと考えることもできる。社会活動と布教は分けるべきだということも見識だが、それが宗教者による活動であるかぎり、最終的には布教という方向へ行くのも自然な姿だろう。

このへんの疑問を頭に入れつつ、茂田さんに話を伺った。

頑張っているひとを助けない

「アーユス＝仏教国際協力ネットワーク」は一

九九三年四月に生まれた、新しいNGOである。

それまでも東京浄青として救援活動や募金活動を行なってきたが、浄青の執行部は二年交代であり、特定の救援プロジェクトを継続していくのは難しい状況があった。そこでより責任ある援助を行なうために、浄青とは別組織としてアーユスを設立したのである。ちなみに「アーユス」とはサンスクリット語で「いのち」という意味。Amitayusといえは「いのちに限りがない」こと。つまり阿弥陀如来のことである。

アーユスの活動は、他のNGOとはちよつと違うところがある。ここでアーユスの行なう四つの事業について簡単に説明しておこう。

一、助成事業 国際協力活動を担うNGOに
対して人件費を提供するなど、支援する。

二、開発協力事業 国際協力、交流のための
プロジェクトの実施

三、ネットワーク事業 パソコン通信などを
使い、内外のNGOの活動を報告

四、開発教育事業 檀信徒向けの教材の作成
や研修会

気がつくのは、現地における直接的な援助活動よりもNGOの支援やネットワークキングのほうに重点を置いていることだ。茂田さん母校の日大三高時代は応援団として、三年間に三回も甲子園に行った経験がある（体重八十キロを超える堂々たる体格で、まるで仏田を耕すブルドーザーという雰囲気）。Jリーグのサポーターではないが、頑張っているひとを応援するプロなのである。でもアーユスの事業内容を決めたの

は、もちろんそれだけの理由ではない。日本の仏教界に、もっと現実の問題に目を向けてほしいという大きな願いがあった。

「私自身のなかでは、今の日本の仏教に対する反省の気持ちがよく強かったですね」

と茂田さんはいう。

難民キャンプで見たもの

茂田さんにしても、最初から救援活動に関心があつたわけではない。最初にボランティア活動に参加したのは、一九七九年のこと。カンボジアの内戦激化にともない大量のランド・ピープル（難民）がタイに流出した際に、東京浄青の先輩にあたる正本乗光さんに誘われてインドシナ難民のための街頭募金をしたのだ。

そのころ茂田さんはカンボジアがどこにある

のかさえ知らなかった。正直いって法衣を着て街頭に立つなんて、恥ずかしいという気持ちのほうが強かった。しかし、思い切つて声を掛けてみると、すぐに募金箱にお金が集まり始めた。その日は四時間立っている間に七万円もの募金が集まった。

「おれたちはインドシナの実情なんて知らずにやっているのに、善意のひとがいるんだなあ」

それは新鮮な驚きだった。寺の息子として生まれ、コースに乗って得度した。しかし、その時点ではつきりとした信仰心を持っていたとはいえない。それが募金活動を通じて、自分のなかに種が植えられた気がするという。

さらに八二年、同じ正本さんに、今度はタイに遊びに行こうと誘われた。飛行機でバンコクに到着した翌日、いきなり車に乗せられて連れ

ていかれたところがカンボジアの国境近く、カ
オイダンの難民キャンプだった。

「このときほど自分が情けないと思ったことは
ない」

と茂田さんはいう。目の前には三万人を越える
難民がひしめいている。一日に何十人が死んで
いくような最も悲惨な時期はすでに脱していた
とはいえ、慢性的な食料難と疾病でひとびとは
弱っていた。衣服はぼろぼろで目は虚ろ、あた
りには臭気が漂っていた。そんな現実を目の前
にして、自分にできることはなにひとつないの
だ。

唯一の光明は難民たちのために走り回るNG
Oのひとたちだった。欧米からいち早く駆けつ
けたキリスト教、ユダヤ教系の団体。日本から
のボランティアもいた。安い給料で、場合によ

つては無償で働く彼らと自分の身を比べ見て、
いったいどちらが菩薩行をやっているのかと思
った。彼らの活動に接するなかで、自分の進む
べき道が見えてきた。それは茂田さんにとって
信仰ともいえるものだった。

それからは、ブルドーザーのごとくただがむ
しやらに、募金集めに奔走したのである。

援助のジレンマ

東京浄清では初めはユニセフ（国際児童基金）
とともに「いのちに水を」というプロジェクト
を実行。これは飲み水が手に入りにくい地域に
井戸を掘る事業で、ラオス、アフリカ諸国に対
して援助を行なった。

そのうち東京浄清の基盤もできてきたので、
さらに大きなプロジェクトを担当することにな



茂田さんの心をゆさぶったタイ・カオイダンのワンシーン。1985年4月。

った。

茂田さんたちは同じアジアの仏教国としてブータンを選び、一対一の支援を行なうことになった。ブータンは政情不安はないけれど、乳幼児死亡率が国連の統計でベストテンに入るような国。千人中二百二十人が五歳までに死んでしまう。まずこれをなんとかしなければと思った。さらに、どうせプロジェクトを担当するんだつたら、ブータンについては日本で一番詳しいと胸をはれるくらいに勉強しようじゃないか。そこで本屋にいったブータンについて書かれた本は片っ端から集めた。ユニセフからのレクチャ―も受けた。

ORS（経口補水塩）を携えて実際に現地に行ってみると、こんないい国はないなあという印象だった。自然は豊かだし、仏教の信仰が篤く国

民性がいい。犯罪もほとんどなく、刑務所にも受刑者が入っていないような状態。そしてなにより、ブータンのひとびとは日本人と似ていた。顔つきも近所の誰かに似たひとを見かけたりするし、着ているものもほとんど着物と同じ。正月の門松や蕎麦もあちらがルーツだという。「これはもしかしたらお釈迦様を選んでくれた国じゃないか」

そう思って、さらに地域に密着したプロジェクトを進める。日本円で五百万円くらいのBHU（簡易保健所）を三か所に設置したのだ。

ところが、人助けはいいことだと喜んでばかりはいられない状況もでてきた。援助が進行するとともに、援助が抱える矛盾も見えてくるのである。

最初の訪問から五年ほどたって再びブータン

の空港に降り立ったとき、茂田さんは愕然とした。空港の周囲にはベンツなどピカピカな高級車がずらりと並び、地元のお坊さんたちが乗り回している。BHUへ視察に行ったときも一応は歓迎されるのだが、なにか白々しいものを感じてしまった。保健所の施設がほんとうに必要なひとのために役立っていないような気がしたのだ。実際に、軍隊が使用しているという噂もあった。

お金が入ればひとの心も変わるだろう。そうこうしているうちにブータン国内における地域的差別、民族差別の問題も耳に入ってくる。国内の事情により、外国のNGOが直接活動できないという問題もある。

「ユニセフとの仕事も、これが限界かなあ」

そんな思いもよぎったが、かといってここで

放り出すわけにもいかない。

そうして辿り着いたのが現在のアーユスなのだ。

NGOと民衆をつなぐ

ユニセフのような大きな団体では、援助も政府レベルの話になってしまい、どうしても上から与える援助という感が否めない。当然、民衆のなかに入って細々とした援助をすることは難しい。一方では小さなNGOがしっかりした理念を持ちつつ、民衆のなかで同悲同苦の精神でやっている。NGOの若いスタッフと話をしていても、知識も豊富でしかも実際に現地を知っている。先輩のお坊さんにはそういうひとがいなかったの、茂田さんもうらやましいと思った。と同時に、

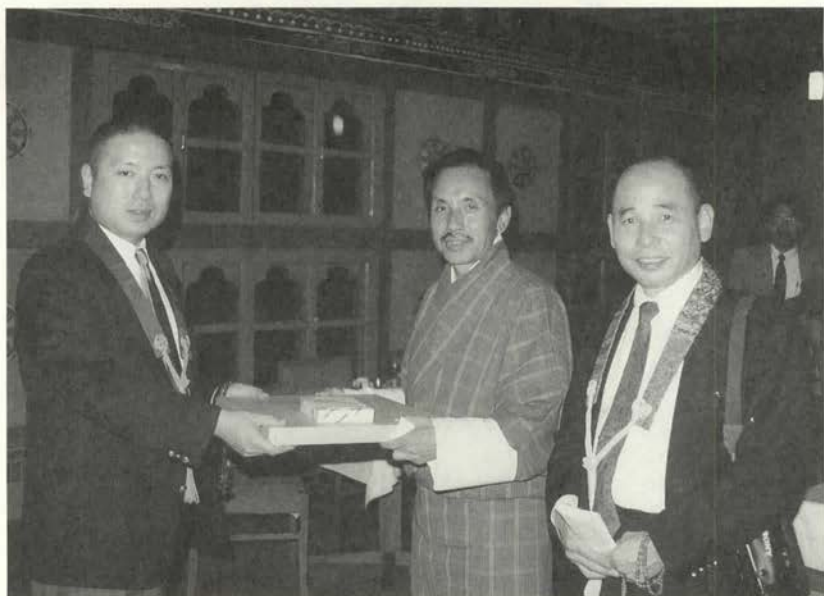
「このひとたち、いつまでもつのかなあ」

と不安にもなった。片手間では出来ない仕事だけに、いつ息切れしてしまうかわからない。そんなNGOを支援することができないか。

しかもたんに金を出すというだけではなく、苦しみを分かちあい、うれしいときにはともに喜べるような仲間でありたい。彼らとともにあることによって仏教者の側も学んでいきたいという。

もうひとつそれぞれの寺は檀信徒を抱えているのだから、こうした情報の発進基地としてお寺を使えないか。つまりNGOの問題意識を、お寺を通じて一般のひとたちと共有することもできるのではないか。

こうした考えに基づき、アーユスでは「助成事業」として「カラバオの会」「サラワク・キ



カンボジアで日本からの記念品を贈呈する茂田さん(左)と正本さん(右)。

ヤンペーン委員会」など六つのNGOに対し、スタッフの人件費として半年で百万円を提供している。

これに対して恵泉女学園大学専任講師の大橋正明さんは、

「援助は毒にも薬にもなる。専門性を持った団体がやらなければ、かえって問題を起すこともある」

「アーユスの助成事業は、海外協力の分野でキリスト教界に比べ一周分くらい遅れていた日本の仏教界が、それを一気に挽回して二周くらい先に出ようとする画期的な方向」

だと評価している。

さらにアーユスの理事のひとりであるパソコン通信に詳しい古庄良源さんは、パソコン通信の大手商業ネットワークのニフティ・サーバのなか

に「AYUSネット」という会議室をつくり、アーユスの活動をリアルタイムで伝えるときも、情報交換していく場としてすでに動きだしている。

ボランティア活動と教化

こうして話を聞いていくと、ぼくが最初に立てた疑問のうちの最初のものは、自ずと解答が見えてくる。茂田さんは「加行を通じて得られなかった信仰が、ボランティア活動によって自分のなかに植えつけられた」とはっきりいう。

国際救援の現場を見ることによって智慧の目が開かれ、慈悲の心が芽生えた。茂田さんにとっては、国際救援活動がそのまま菩薩行であり、仏の道を実践することにはかならない。寺における法事も大切なことだけど、第三世界に生き

るひとびとの現実を知ってしまった今は、彼らのために行動せざるをえないのだ。

さらにいうなら、万人が救われなければいけないという信念は、口称念仏によって当時の貴族的な仏教に大展開をもたらした法然上人の願いそのものだろう。

ならば日本に仏教寺院が八万を数え、僧侶が三十万人いるというのに、こうした活動に参加する仏教者の数がそのうちのほんの一部なのは、どうしてなのか。またひとつ疑問が湧いてしまう。

「仏教って要するに衆生救済でしょう。お坊さんが衆生救済してるのかなあとと思ってしまふ」と茂田さんはいう。

もうひとつの問い、ボランティア活動が教化につながるのかどうかという点はどうだろう。

このことに關して茂田さんはひとつのエピソードを話してくれた。

勝樂寺の壇家さんでまだ二十代の若いお母さんが、四歳の子どもを白血病で亡くした。その悲しみようは尋常ではなく、いまにも子どものあとを追って自殺しそうにも見えた。そのとき茂田さんは通夜に八時間もの時間を費し、国際救援の現場で経験したさまざまな話を語った。インドシナ難民のこと、パレスチナの子どもたちのこと。

「同じ悲しみを抱えたひとは、世界中にたくさんいるんだよ」

そう話すとお母さんは、亡くなった子どもの衣類やおもちやをぜんぶ出してきて、

「他の国の子どもたちのために役立ててください」

といった。遺品は大きな段ボール箱に五個分もあった。

この母親は今では熱心に念仏を称えているという。茂田さんの経験が、信仰を持つひとを確実にひとり、増やしたのだ。

さて二年目を迎えるアユスだが、九三年度は順風満帆ともいえないスタートだった。収入は当初予算の五千万円を下回り、三千三百万円。なによりも誤算だったのは会員数が思うように伸びなかったこと。この点には茂田さんも不満のようだ。

「地元のお寺にアユスの趣旨を手紙に書いて送り、実際に会いに行っても門前払いというところもあります。社会的な問題に全然関心がない。そういうお坊さんはアブナイと思う。そういう



「東南アジアの子供たちへ何ができるのか」(1989年カンボジア)

ひとに限って法事のときも儀式だけやって壇家さんとしやべることはないらしい。壇家さんも、うちの住職なに考えてるんだろう、と思ってるでしょうね」

それでも現在、アーユスのスタッフの僧侶は五十人を数える。この数は強みだ。もちろん浄土宗だけでなく、浄土真宗、日蓮宗、曹洞宗からの参加もある。この力をあわせたら、できないことはないだろう。

「はつきりいつて私以外のスタッフはみんな優秀なんです。勉強もできれば言葉もできる。パソコンもできる。私なんて馬鹿ですから、大声あげて騒いでいるだけ。」

そんなふうに語る茂田さんだが、茂田さんの行動力がなかったら、もとよりアーユスは始まらなかったのである。

念仏信仰と武士道

高橋富雄

イラストレーション—小菅遼



その次に、こういう話が出ております。念仏行者というのは、絶対に西方世界、西方浄土の教えに背かないということを実行する人である。熊谷は日常そういう信仰に徹していたというの

でございます。そこで、こういうことになったというのでございます。

あるとき、京都から自分の領地の武蔵の国に下ることになりました。馬に乗って東海道を下

るわけです。とても歩いていくわけにはいきませんから……。さてその東下りに、熊谷は、馬の鞍を東に向ける、すなわち前の方向に向けるのではなしに、京都のほうに向けて馬の鞍を置いた。ですから、おしりのほうに向かって進むように鞍を置いたそうでございます。本人はその鞍に乗るわけですから、後ろ向きに関東に下ることになる。西に向かったまま後ろ向きに関東に下ったというのでございます。さて、その心を歌に詠んで次の一首になったというのです。どうも歌にならないのですが、確かに三十一文字になっていますから規格にはあっていますが。そして、そこが熊谷方式なのです。

浄土にも剛の者とやさたらん

西に向かひて後ろ見せねば

さすがに極楽浄土世界でも熊谷という者は剛の者である話題になることであろうよ。かりそ

めにも西に向かつて後ろを見せない勇士だから。恐れ入りました。私などがこんな歌を詠んだら「高橋先生、ふざけてる」ということになるでしょうが、熊谷だからこれはまじめの名歌になるのでございます。どんなときでも、西方浄土世界に背を向けることをしない。行住座臥、西方浄土は拝むところ、背は向けないとそう徹底しているのです。旅行するときまでそうなのです。西方浄土を背にしないことで生き抜いてきたのである。敵に絶対背を見せない剛の者と譽れをとったこの熊谷が、念仏行者としても浄土第一の剛の者というように、極楽世界でもきっとそうほめてくれるだろうよ、東海道を下るにも、西方浄土に背を向けることはしなかったのだから。大まじめに極楽武士道に胸を張っているところが味増です。

ここにはつきりしているのは、熊谷という人

が武士道に徹して日本第一の剛の者として生きるという心をさながらに、浄土念仏信仰第一の人になる。極楽にいつても信仰第一の強い人、「剛心の者」と言ってもらうのだという意気込みで念仏に励んでいるということです。つまり、彼は武士道を捨てて信仰に入ったのではない。武士道を一層徹底するものとして、すなわち一層深められた武士道として念仏一行道を行ずるということになっているのでございます。念仏は弱い人の消極の行ではない。最も強い人の最も強い剛信ということになります。熊谷はその証明として歴史的なのでございます。

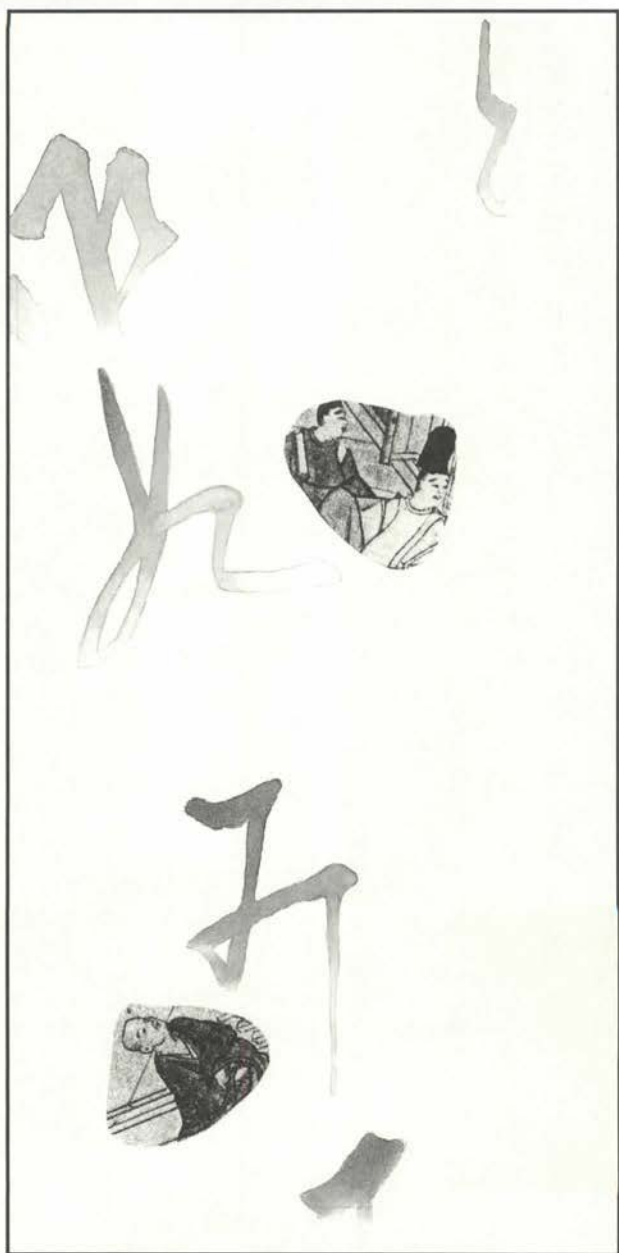
この物語の感動的な場面は、最後に彼が死ぬとき、いや往生を遂げるときです。彼は前もって何年何月のこの日に死ぬということを予告して、ごていねいにもちゃんとそれを町の掲示板に広告したということです。そして「うそだと思

うならその日に来てみて、確かめてくれ」というふうに触れをまわしておいたというから念仏に入ったものです。このことは、本当に信仰が深まって、生きながらにして浄土の世界というものを自分のなかに靈感する人でないと、このように自分の往生のときを予告するなどということはできないわけですから、これは大変な評判となったのでございます。うわさは、前回の九条月輪関白の耳にも届いたのでございます。

九条兼実からは、法然に対して手紙で照会があったのでございます。ちゃんと『行状画図』に書いてあります。「昔ならいざしらず、今このような末世に当たって、生きながらにして往生を遂げるなどというようなことを予言することはあり得ないことだ。一体これは本当なのか。貴僧は師としてそれを確認しておられるか、信じられるのか。」月輪関白からはそういうお尋ね

があつたのでございます。もつともです。

法然様のお答え。「まことにこの末代、濁世に当たつてこういうことはありがたいことである。しかし、あらゆる状況から考えて、熊谷蓮



生房についてだけはこれは真実と考えるよりほ
かありません。」法然自身も普通あり得ないこと
が、熊谷においては真実として認めざるを得な
かったのです。彼の信仰はそのくらい深まつて

いたことになるのでございます。

歴史における奇跡みたいなことが、この歴史上の最も愚直な武士について語られているのでございます。往生記録の圧巻ということのできるすばらしいものでございます。彼はみずからの往生について願をかけたというのですが、その願文が今日、記録に残っているのですが、す。彼がこのためにかけた願文が古文書で確かめられるのですから、これは歴史の中の往生物語なのです。

さて熊谷の願いです。どういう願いを立てたのでしょうか。

「自分は、上品上生の往生しか遂げない。それ以外の九品あるうちの他の往生は遂げない。なぜか。本当は恵心僧都源信のような方でさえも、下品上生という程度の往生しか願わなかったのに、自分のように学もない、信仰も足りない人

が、最高の上品上生を願うなどということは、まことにおそれ多いことである。だから自分の身のための願いとしては、下品下生でも立派すぎるくらいである。しかし、私があえて上品上生の最高の往生形式を願うのは、自分だけが救われるためではなくて、私が一足先に極楽に行つて、有縁無縁のあらゆる人たちを、自分の上品上生往生の功德によってみんな極楽に迎えられることができるようにするためである。そのためには、自分が仏様に一番近いところにいると、みんなをそうすることができない。そういう願いを立てているので、自分は上品上生の願しかかけない。他の下八品は願わない。」

そう宣言して、仏様にも強引に願をかけたそうでございます。「もしこの願が間違っているなら、間違いだと仏様からお告げいただきたい。いいなら、その願いを聞き届けてやるという証

明を与えていただきたい。そういうふう願をかけた、これも記録にあるのです。そして一心にお祈りしていたところ、夢の中で、一本の細い蓮華の上に白い花が咲いていて、仏様が周りの者に『だれもこの蓮の台に登ってはいけません。ここは蓮生房だけが登ることのできる台だから』とお告げがあった。次の日もおなじような夢を見た。だから、これは上品上生疑いがないお告げである。そういうものだったのです。

またこの願では、こうも発願したとあるのです。もしこういう願をかけるのが間違いないというならば、一体、法然様が、善悪無知、有智にかかわりなくすべての人を極楽に救い取るという教えも、うそになってしまうのではないか。阿弥陀様の十八願というのもみんなうそになるのではないか。だめな人を救うということが約束なのに、自分が立派な願をかけてそこに

生みたいというこの切なる願いを仏様が聞き取ってくれないようであれば、私もうそを教えたことになる——そういうものだったそうでございます。

これは強訴というものです。熊谷武士道の強力にものを言わせて、仏様も法然様も押し切ってしまう強迫ということでしょうね。普通の信仰の人はこういう言葉は使わないと思います。しかし、それは信仰としてもおとりしたものになることは避けられません。私は、この武士道の一念力こそはキレイ事に終わっている信仰の岩の底を貫いて、稀有の念仏一行道を成就することになったのだと、考えるのです。武士道行者としての蓮生房ということを考えて、はじめてこの言葉の意味もわかってくるのです。

そういうふうにして、何年何月何日に死ぬと言ったので、その日にみんな集まったところで、

またぞろ熊谷の名舞台となるのです。一所懸命念仏を唱えていた蓮生房、念仏をやめて、「きょうの往生はとりやめた」と言っただけなんです（笑）。「仏様がまだ早いとおっしゃったから」と、ケロッとして言っただけなんです。「九月四日。半年ばかり延びるが、この日にする。」そう宣言したのです。みんなあきれかえってしまいました。第一、顔向けもできなくなると、家族の人たちが泣かんばかりにして駆け寄って、だから言わぬことを。こんな大騒ぎして、「この日、死ぬ」と言って人を集めておいて、この先どうなさると嘆きわめき立てました。平然として、蓮生房。「いや、これはわれ蓮生房の都合ではない。仏様が、まだ早いとおっしゃるから、そうなったのだ」と、涼しい顔でそう言っただけなんです。これはただ者ではありません。ここまでは来ると、これは武士道念仏宗と

いうことになりますね。念仏だけの人はこういうことはできません。武士道だけの人もこうは言いません。まったくこれは両者一体ですね。そして、そのことは通り、その次の九月四日に莊嚴なる往生をとげたのでございます。ただ、ここには『行状画図』に少したく誤りがある、年号を一年間違っています。それから、『画図』では武蔵の国の本領で亡くなったことになっていますけれども、歴史記録によると、これは京都で亡くなったとするのが本当でございます。だから、そういう点での若干の間違いはありますが、それでも、大きな経過に間違いはないのです。私は、最後にこれについて、歴史からの証言を与えることにいたします。法然上人の仏教の物語ではそれでいいでしょうが、歴史ではそういうことはあり得ないだろうというのが、大方の観測でしょうが、そうではないのです。鎌倉

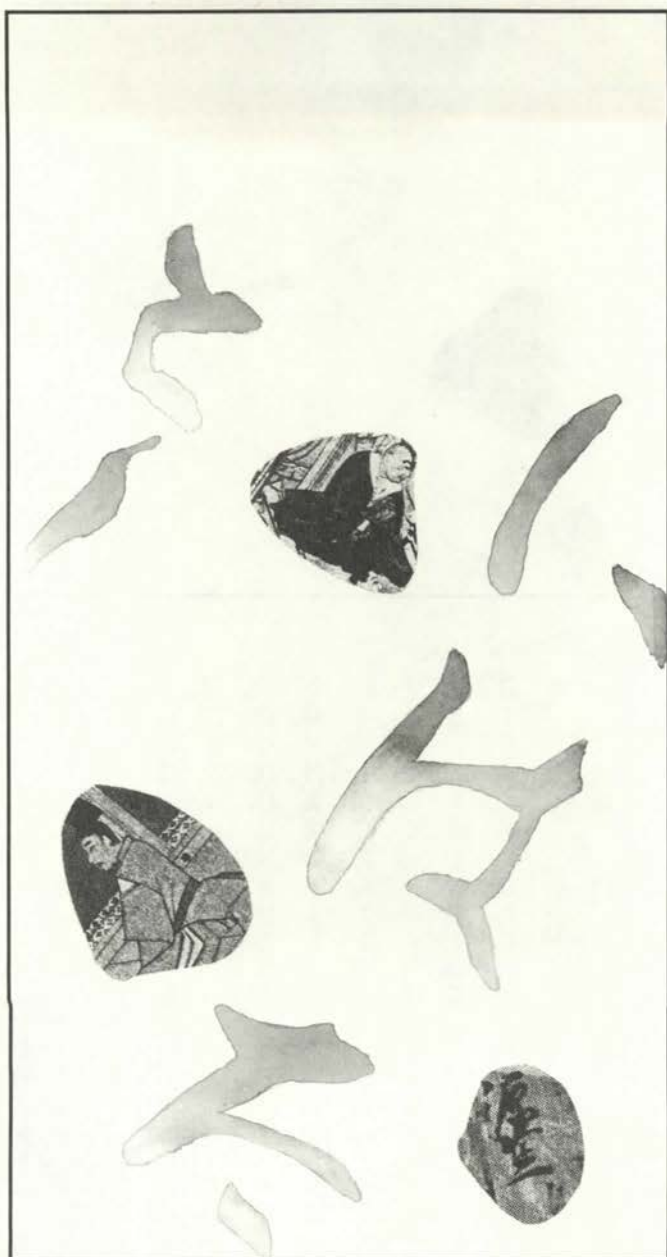


時代の公の記録の一つ、鎌倉幕府の記録の『吾妻鏡』というものに、熊谷のこの往生の模様が詳しく書かれているのでございます。ですからこれはほぼこのとおりの事実として歴史的に確認できることなのでございます。熊谷直実の子供の小次郎直家という人が、父に代わって鎌倉幕府に仕えておりました。幕府に特別な休暇願いを出してきたのでございます。役所で調べたところ、「この年の九月四日に父が京都で亡くなる」という通知が来ているので、自分はそれに立ち会うために京都に行かなければいけないから、しばらくの間欠勤をお許しください。」という欠勤願でした。

幕府の人たちもみんなあきれてしまったのでございます。「武士ともあろう者が、こんなことを、真にうけて。」そういうことだったのです。しかし当時、最高の知恵者でかつ最高の地位に

あった大江広元という人だけが、首を横にふりました。「いやいや違う。普通の人ならあり得ないことだろう。しかし、熊谷蓮生房は信仰の

志が厚く、日常、ほとんど生き仏のように、あらゆるところで普通の人のできない数々の善行・奇行、いろいろな瑞兆を示されている。こうい



う人は、普通の人のあり得ないことを実現、実行できるのだ。だから、熊谷蓮生房についてはこれは事実と考えるべきである。」そう言つて、幕府では、正式にその九月四日に亡くなるのに立ち会うための旅行に対して、休暇を許可したというのでございます。

それから、そういう見事な往生を遂げたことは、京都で、先程申し上げた大番役を勤めていたところの千葉一族の東重胤という人が京都から帰つて、幕府に近況報告をしたことの中に、「この日、こういうふうには熊谷は死を予告して、それにたがわずその日のその時間に確かに亡くなった。自分もそれに立ち会つてきた」と報告しております。ほとんど奇蹟にしかならないようなことを、単なる物語としてではなくて、重要なところでは全部歴史記録に基づいて往生伝をなしているところに、この『法然行状画図』

というものの歴史的意義があるのです。

まことに感銘深い宗教物語と言わねばなりません。津戸といい甘糟といい、そして熊谷といい、この当時、一文不知の乱暴者とされていた者たちばかりでございます。そういう人たちが最も信心深い人としてこれだけの奇蹟のような立派な極楽往生を遂げたという記事を、大部分、記録に基づいて書き記すことができると思へば、これは法然上人様の徳を讃える最高の歴史物語になるものではないかと思つて、私は最後に皆さんに対して、これだけ確かなものに基づいて法然様の徳を讃えることのできる記録を、祖師伝としてお持ちになる幸せを心から祝福申し上げます。私のお話を終わらせていただきます。

ご清聴、ありがとうございました。

(了)

(東北大学名誉教授・盛岡大学学長)

観無量寿経の世界

石上善應

イラストレーション|| ホビ・川津



マガダ国の都ラージャグリハ（王舎城）にア
ジャータシヤトル（阿闍世）という王子がいた。
かれは悪友であるデーヴァダッタ（調達）にそ
そのかされて、父ビンビサーラ（頻婆娑羅）王を

むりやり七重になった奥深い部屋に閉じこめ、
すべての家臣たちを制して、ひとりも行くこと
がないようにした。王妃ヴァイデーヒー（韋提
希）は大王を敬愛していた。王妃は沐浴して身

体を清らかにして精製されたバターに蜂蜜を加え、麦こがし状のものをまぜあわせたもの（麴）をその体に塗り、胸飾りの珠玉のなかに液体（蒲桃漿）を入れて、ひそかに王のもとへ行き与えていた。

『観無量寿経』（観経と略称）は、この物語から始まる。大王は釈尊のおられる郊外の耆闍崛山に向かつて礼拝して、八戒を授けてほしいと願う。釈尊は目連や富楼那を遣して大王のために法を説かせた。二十一日間を経過しても、王妃からの飲食と説法を聞いて、つねに喜びにあふれていた。アジャータシャトルはすでに父王が餓死していると思い、門番に尋ねると、王妃がやってきて、王に食べさせていることをとめることができないと告げる。激怒したアジャータシャトルは母を殺そうとする。しかし、今ま

で父を殺した王は数多いが、母を殺した王はひとりもないかった。母を殺そうものなら一族の名を汚すばかりか、王宮に住むことはできないとめられて、母親を奥深い部屋に閉じこめてしまった、というのである。

『観経』は、父王が死んだかどうかは語らない。しかし、この物語は、善導大師の『観経疏』によつて、アジャータシャトルの出生の秘密すら知ることが出来る。そのために、父親殺しをそのかかれて、実行することになるのに、『観経』は、その結果はふれていない。『観経』では、なにもこの悲劇を詳しく語らなくてよく、その後にくる經典の本論の導入部にすぎないのであることを、まず理解しておかなければならない。

王妃ヴァイデーヒーは突然の幽閉に錯乱する。

すつかりやつれて、釈尊のおられるほうに向かつて礼拝し、お会いしたいと願う。礼拝して頭をあげたとき、釈尊が目連と阿難を従えて、その部屋の中におられるのを見た。王妃は身をよじり、首飾りなどを断ち切つて、わが身を投げ出しては号泣して、訴えるのである。「わたしは以前にどんな罪を犯したのか、なぜこんな悪い子を生んだのだろうか。また、釈尊はどんな因縁でデーヴァダッタを親属となさっているのか。ただ、お願い致します。釈尊がわたしのために、広く憂い悩みのない世界を説いていただきたい。その世界に往生したい。わたしはこの世にいることを好まない。この世は濁りきつた悪いことをする人びとで満ち満ちている。悪い声すら聞くことなく、悪人を見ることもないように願うだけである。ここに五体投地して、深く懺悔し

ます。どうかわたしを清らかな修行の結果得た仏の世界を見させたまえ。」

泣きに泣いて、気持ち落ちついたのか、心から懺悔する。号泣し、仏の世界をひたすら願う心情は、王妃であつても悩める人間そのものの赤裸々なすがたを示すだけであつた。あらゆる信念も先入観もくずれさつて、ただそこにひれふすのみであつた。泣きに泣いたあと、無心に近い形で釈尊を見あげれば、今までと違って、同じ場所がまったく別世界のように輝きわたつてみえたに違いない。『観経』はここで一変する。

王妃が慟哭したあとでの願いは、極楽の阿弥陀仏のもとに生まれたいということである。すると釈尊は微笑された。仏の微笑は王妃の心の変動を熟知したことを意味する。このとき、は

じめて仏と教えを請う王妃との心が一致した。

そこで釈尊は教えを説き始めた。

なんじは知っているか。阿弥陀仏はここより遠くはない、ごく間近におられることを。まさに思いをこらして極樂を觀想せよ。その極樂に往生したいならば、第一に、両親に孝養をつくし、師や年長者を敬って仕え、絶えず慈しみの心をもって殺生せず、十種の善行を實踐せよ。

第二に、仏・法・僧の三宝に歸依し、多くの戒を實行し、定められた振舞いをする。第三に仏道を求める心を起こして、經典を讀誦し、淨土往生を願う。この三つの實踐は過去・現在・未來にわたる仏たちが、仏になられるために實踐された基本の行であった。なにも王妃が悪い行為をしたから、とくに課したのではない。仏も人間もみな同じことをするだけである。

仏は「ここを去ること遠からず」ということばは、王妃をどれだけ力づけたことであらうか。しかも、人間生活は自分と自分を取り巻く人びととの関わりを大事にすることから始まることを示された。そのことは、多くの人びとに見守られ、支えられて一日一日を過ごしてきたことをも意味している。

すぐれた対話は新しいものを生み出す。自分では無意識に考えていたことでも、相手のヒントで再認識することもある。対話とはまさに自己をより向上させるものである。釈尊はまさに、王妃の思いをさらに深め高めるように、考えを引き出させてくれる。

『觀經』はイメージ（想像）を与え、そのイメージを通して別の次元の世界へとみごとに導き高める。イメージだけが新世界を見出す役割を

果たすことになる。王妃のような凡俗な人間が観想するのには重要なことである。

最初の観想は日没である。西方に沈みゆく太陽を静かに精神集中して、眼底にやきつかせる。気を落ちつかせる最初の観想としては、ふさわしいものである。ついで水が清らかで透徹なるものを思い浮かべ、さらに氷の透き通ったありさまを観想する。まるで四方に鏡をおいて、奥の奥まで重なり、輝きが億の千倍の太陽のように輝き連なりあう。この観想ができるようになるれば、その一つ一つを、よりはつきりと観察できるように練習していくことを勧めている。沈みゆく太陽に精神集中するのは、自己催眠にはきわめて効果的であり、さらに、そのうえ、水への瞑想は能動的想像へと高められ、阿弥陀の国の水であることがとくに重要であると、『観

経』の説き方を称讃するのは、心理学者ユングであることを、ここに付け加えておきたい。

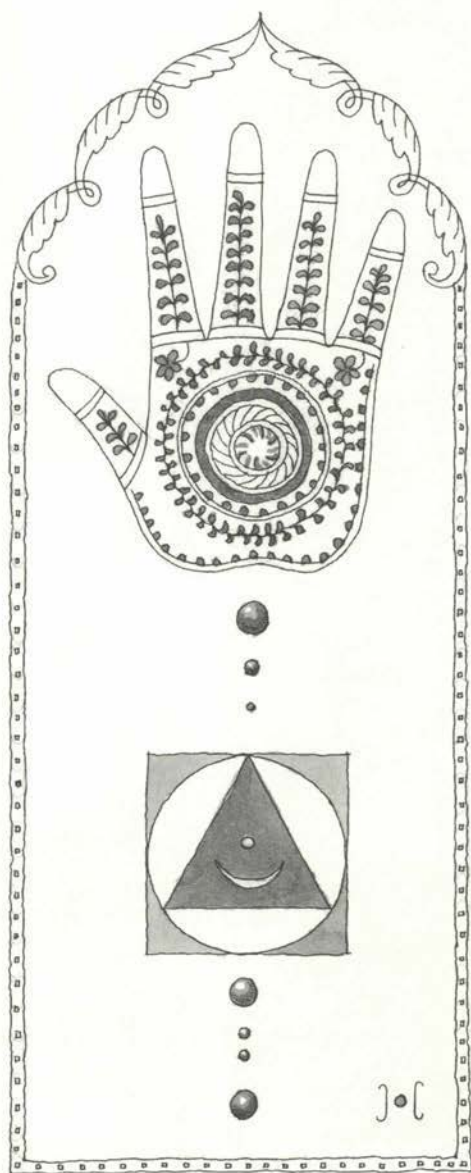
日想観や水想観から、極楽の美しい大地の観想へと進む。さらに寶石で飾られた樹木、八つの池の水と、一つ一つ極楽の情景の観想へと進み、ついに仏身に至るのである。

釈尊が阿弥陀仏をよく考えよ、これから汝のために一切の苦悩を除き去る法を説き示されるから、よくよく心にとどめるよう語る。すると阿弥陀仏は煩惱の苦しみに迷い悩んでいる人びとのために、大悲の精神をもって、自ら進んで立ちあがり救いの手を差し伸べようとする。これを住立空中の阿弥陀という。まさに来り迎えるようとなさるのである。

善導大師は、この説明にあたって、一心に懺悔し、今までに造った罪を心から吐露しろと語

っている。

十三の観想のなかで、もっとも大切にされてきたのが第九観である。『観経』は、阿弥陀仏の一つ一つの特徴があり、詳しくは語ることはできないが、仏の光明はあまねく十方の世界を



照らして、念仏する人びとをおさめとって、捨てることはない、と力強く語る。善導大師は「仏の光明はあまねく照らすのに、ただ念仏する者のみを摂する」といわれ、法然上人は「弥陀の光明は、他の行をする者を照らさず、ただ念仏

する者のみを摂取してくださる」と力強く語る。阿弥陀仏の光明はあまねく迷える衆生の上に注がれている。それに衆生は答えるべきである。われわれ凡夫の念仏のみが仏の呼びかけに答える唯一の方法であった。凝視し続ける仏であるからこそ、大慈大悲の精神が脈打っている。「仏心とは大慈悲これなり」と説くことばは『観経』の基調の思想である。

阿弥陀仏について、観音・勢至両菩薩の観想へと進み、阿弥陀三尊を観想したあとには、極樂に往生した自分自身を観想するのである。極樂往生する自分の観想は、臨終のとき、安らかに往生を願うことができるようにすると同時に、仏とともにある自己を確立することにある。ここに至って、仏と凡夫との交流が成立することになる。

最初の日想観から第十三観まで、極樂をイメージすることは、じつに壮大である。しかし、すべての人間に、このような観想が忠実に続けることができるものであろうか。意志の強い優れた人物ならばできるかも知れない。それでは凡俗な人間はどうすればよいのであろうか。念仏する人びとを摂取して捨てることがない、積極的な仏の働きかけがあっても、王妃ヴァイデーヒーは確かに仏にすべてを任せただけである。けれども、わが子との不幸な結末、釈尊と血縁あるデーヴァダッタを恨み、その思いを捨てようとして往生を願ったものの、いつまでも、この観想を続けることはできなかった。『観経』では、心が迷い、動揺し続けている凡夫にも、往生できる方法を説いたのが、十三観のあとの九種の仕方であって、以前の観想とは、その説

き方は性質を異にしているのである。

その第一は阿弥陀の仏国土に生まれたいと願うならば、三種の心を起こすことである。その第一は自ら懺悔して、まことの心をつくすことである。第二は阿弥陀を深く信することである。第三はすべてを振り向けて浄土に往生することを願う心を起こすことである。これを上上（上品上生）の往生という。三心の中の第二の深く信すること（深心）を、法然上人は三心の中心と考えておられた。

「自身は現にこれ罪悪生死の凡夫」と深く省み、迷いの世界から抜け出るのは絶対でない、いかに罪深い凡夫であることかということを感じ（信機）、第二に阿弥陀仏の四十八願によって、人びとをくまなく救いおとすのださる。その本願の力によって、救われないわたしを必ず

往生させてくれるということを信ずる（信法）

という二つの深信は、善導大師の教えである。

仏の大悲が注がれているのに、その大悲に背かざるをえないわたくし、罪深くて、とうてい救われないわたくしを、そのまま包容し救いとうとする本願を誓われた仏を信するのである。上上の往生でも、その背後に、このような理解の仕方が含まれていた。

「たとい余事をいとなむとも、念仏を申し申しこれをする思いをなせ。余事をしし、念仏すとは思ふべからず」ともつねに語りきかせた法然上人が、念仏に包まれた生活を、毎日の生活の基調にせよ、そうすれば、きばらずに、自然にそなわってくるものである、と示すことばは、じつに尊い。こうして、われわれに上品上生は身近なものとなってくるのである。

しかし、経典は確かに九種の段階を示していた。最後の下下の往生は、親を殺し、師を殺し、仏に背き、ありとあらゆる悪い行為をしつくし、苦しみを受けることも底がないほどである。い

よいよ臨終のとき、善知識になぐさめられ、十べんの念仏をとえれば、長い間の罪を除くことになるかと教えられ、南無阿弥陀仏と十念して往生できることを勧めている。



經典の説きかたからいって、最後はもつともすばらしい境地を示すはずであった。しかし、この九品往生は、浄土を願ひ求める人間の素質・能力の程度の差をだんだん下降していくかのよう^にに説かれている。いうならば、九品はまるで付録の性格をもっているように見える。確かに『觀經』を字義通りに考えれば觀想が中心である。しかし、宗教はもつとも底辺にいる人間が救われなくては、果たして宗教といえるのであろうか。あらゆる人びとに仏の慈悲が注がれているのであるならば、極悪なるアジャータシャトル、かれをそのかしたデーヴァダッタ、情愛のきずな^にに縛られて身動きできない王妃ヴァイデーヒー、過去に過ちを犯したであろうビンビサーラ王、その、誰もが仏になり、あるいは仏からの救済にあずかなければならない。經

典は語られるべくして語られている。九品の往生は客觀的に並べてみたり、差別して眺めるものではなかった。わたくしがその当事者として、ここで考えれば、絶対に救われない人間である。いかに至らない人間であることか。しかし、仏はそのわたくしを往生させてくれるという力強い本願の誓いを示されている。仏の本願がほんものとして完成するのは、わたくしが往生したそのときであるからでもある。下下の人間であると反省し、懺悔したとき、すでにより劣っているという考えはどこにもない。下の下なる者、それ以外、わたくしにはないのである。比較などという客觀の見方はどこにも存在しない。下品の者こそ、仏の正客としてすえられているところ、『觀經』の精神である。

（大正大学教授）

念仏信仰の系譜

中国編

須藤隆仙

中国浄土教の始まり

中国に仏教が伝えられたのは、紀元のわずか二年ほど前に、大月氏の王の使者が来て學者に仏教經典を口授したのが始まりとされておりま

す。大月氏というのは今のアフガニスタン北部にいた民族（イラン系説が有力）であります。その後一時、中国と西域との交通が絶たれたため、仏典は来なくなりましたが、後漢の時代に再び交通が開かれたので、仏典がもたらされる

ようになりました。後漢の明帝（AD五七―七五在位）が夢で西方に仏様がいることを知り、使者を出して経を求めさせた話などが伝えられております。明帝の異母兄楚王英も大変な仏教信者であつたと伝えられております。

やがて二世紀に入ると、中国で仏教経典が翻訳されるようになりますが、その最初の訳者は安世高という人で、今のイラン地方にあつた安息国（パルティア）の皇太子から出家して中国に來た人でした。主に小乗仏教経典を訳出しました。同じ頃、支婁迦讖という僧が大月氏国から洛陽に來て訳経しますが、この人は大乘仏教の経典を訳してくれたのです。その中に『般若三昧經』というのがありまして、これは阿彌陀仏が説かれてゐる経典なのであります。訳出したのは後漢靈帝の光和二年（一七九）とされ、これがじつに中国淨土教の始まりになるのである

ります。西曆一七九年といひますと、インドでは龍樹菩薩（インドの念仏宣教師）の時代でありまして、この頃すでに中国にお念仏の種がまかれていたのであります。

三部經の訳出

『般若三昧經』については後述しますが、それから数十年たった頃（二五二）、康僧鎧という僧が『無量壽經』を訳出してくれます。この人は西域の人だったともインド人だったともいわれておりますが、いわゆる、法然上人様が『淨土三部經』としてご選定くださった三經の一つが、ここに現われるわけであります。

これよりだいぶ遅れて、後秦時代（四〇二）に鳩摩羅什によつて『阿彌陀經』が訳出され、その少しあと（四二四）頃に曇良耶舍が『觀無量壽經』を訳出して、いわゆる淨土三部經（後

の呼称)が出そろうわけであります。

これでおわかりのとおり、中国には、仏教が伝えられて間もなく(百年後ほど)『般舟三昧經』のような浄土經典が出現しているのであつて、このことをよく知っておく必要があると思ふのであります。

浄土の信者

經典が訳出されますと、次にはその説いてある内容に従つて、信者が出現してまいります。

ただしこの中国初期仏教の信者というのは、いろいろな經典が雑多に入つてきて訳出されたために、信者もまた、いろいろと入り混つた信仰をもつていたのであります。例えば、阿弥陀仏も信仰すれば、釈迦・弥勒・観音という諸仏も信仰する。般若の空というものも学べば、念仏も称える、といったふうであります。前記の楚

王英なども、釈迦仏を黄帝・老子などと一緒にまつていたのでした。

そういった中で、お念仏の信者がはつきりしてくるのは、『無量寿經』が訳出されてから間もない頃のことでありまして、晋の武帝の代(二六五―二七四)に關公則という人が洛陽で死んでおりますが、この人の靈が同志に現われて、「自分は阿弥陀仏の西方極樂世界に生まれてゐる」と告げたということが、『冥祥記』という古書に記されているのであります。この人は大變性格のよい人だったそうで、生前よく法事を勤めていたというのですから、おそらくお念仏を称えられたのであつて、それがこういう説話になったものでありましょう。關公則の門弟だった衛士度という人も西方浄土に往生したというのですから、念仏の教えが広まっていたことが知られるのであります。

東晋の太興末年（三二一）竺僧顓じくそうけんという坊さ

んが江南で亡くなっています、この人の臨終にはお念仏を称え、阿弥陀仏のご来迎らいようを感じたと記したのもありますし、この頃、竺法曠はうこうという坊さんは『無量寿経』（今のとは異本）を講義したということも伝えられています。また竺道隣どうりんという坊さんは阿弥陀仏の御像を造ったそうであります。

このような古書に伝えられる事実をみますと、当時、すでにお念仏信仰がかなり中国に芽を出し始めていたことがうかがわれ、大変に尊いことと思われるのであります。

念仏信仰運動

しかし、当時の信仰は前記のように、それ一つだけの信仰ではなく、いろいろな信仰を同時に行なうという形のものでしたから、これらの念

仏者たちもまた、他の信仰もなされていたことでありましょう。例えば東晋代の支遁しとんという学僧などは、仏師に阿弥陀仏像を造らせて自らその讃文を記しておりますが、他に釈迦・弥勒・文殊もんじゅ様などの讃文も遺しておられるのであります。

そのうちに熱烈な念仏信仰運動を起こした坊さんが現われました。慧遠えんという坊さんであります。後にも同名の方が出ておりますので、こちらの方は住所を冠して廬山慧遠ろさんえんと呼びしております。法然上人は『選択本願念仏集』（略して選択集）の中で、念仏には廬山慧遠流・慈愍三蔵流・道綽だく善導流の三流があると仰せられた、その慧遠法師であります。インドでは以前に述べさせていただきましたように、龍樹菩薩が二世紀末あたりに念仏の教えを説かれ、世親菩薩が五世紀前半頃に大変な念仏信仰の告白をしておられるのでありますが、慧遠法師は世親菩薩

よりちよつと早いぐらいの時代の人なのであります。そんな時代に中国に慧遠法師のような方が出られたことに注目する必要があると思うのであります。以下、慧遠法師について述べます。

慧遠法師

慧遠法師（三三四―四一六）は雁門（山西省）の人で、家柄の詳細は不明ですが、大変な秀才だったそうです。長じて官吏になりましたが、戦乱が相次いだため隱棲を志し、二十一歳で道安という坊さんの弟子になりました。この道安師も後に同名の方が出ますので、この方を弥天の道安と呼んでおります。とても氣宇広大な人です、自己紹介するのに自ら「弥天の道安」と名乗ったのだそうで、弥天とは空一ばいに満つるの意であります。

この道安師がまた大変な方でありました。中

国で初めて仏典の整理をされた学僧であります。鎌倉後期に奈良に凝然という学僧がおりまして、『浄土法門源流章』という貴重な書を著わしておられますが、その中で、中国の浄土教の僧として先ず第一にこの道安師を挙げ、「浄土論を造り法義を開顯」と記しているのであります。そうすると道安師も念仏信奉者だということになるのですが、近年の研究では、道安の『浄土論』とは、後代の道安著らしく、弥天道安のものではなく、したがって弥天道安師に念仏信仰はなかったらうということになっているのであります。

しかし私は、それはちよつと違うのではないかと考えているのであります。と申しますのは、慧遠法師は大変に道安師に心酔しておられたのでありまして、その慧遠法師が大念仏信仰運動を起こされたということは、道安師が念仏を肯

定しておられたからではないでしょうか。『浄土論』の著述はなかったにしても、念仏のこともいっておられた、それで慧遠法師は念仏者になったのだと思うのですが、如何でしょうか。道安師は弥勒信仰者だったことが伝記に見えますが、弥陀念仏も否定はされなかったと思うのであります。

ことに道安師は不幸にも非常に醜い顔形をしておったそうで、そのため少年時には苦勞をされたそうです。『無量寿經』に説く阿弥陀仏の四十八願の中には、醜惡や不具を救うという有難い願があるのですから、たくさんのお経を整理された道安師が、阿弥陀仏に無関心であつたとは考えられないのであります。

慧遠法師は道安師からいろいろと仏教の學問を学びましたが、当時は戦乱が続き、南下して襄陽に來ました。だがそこも危くなつたので、

道安師はたくさん弟子に解散を命じて長安に去り、慧遠法師は南に向かい、江西省北部の鄱陽湖西岸にある廬山に入ったのでした。この山はもと仙人が入っていたといい、のち多くの仏僧が入った山として有名であります。法師はこの山に八十三歳で没するまで三十三年間住まれたのであります。そしてここで大念仏信仰運動を起こされるのであります。

念仏結社「白蓮社」

慧遠法師の大念仏信仰運動とはどういうものだったかといいますと、法師のおられるこの山に、法師の徳を慕う人たちが、たくさん訪れたのでした。そこである時、そのような信者百二十三人を集めて、阿弥陀仏御像の前で大念仏を称え、西方極樂浄土に生まれることを願ひ合つたのであります。そして、その集いを白蓮社

と名づけたのであります。その時に読まれた願文によれば、集まった人たちは、出家者もおり、在家者もおりまして、みなばらばらの信仰ではなく、心を一つにして西方の阿弥陀様に心を向け、救済を仰ごうというのであります。それは元興元年（四〇二）七月のことで、法師六十九歳の時であり、山に入って十七年目のことでありました。

私は、これは重大な信仰史実であると拝し上げていますのであります。といいますのは、個人の信仰を結社という共同信仰団体のかたちにされたことに、見落としてはならない重大さがあるからです。

慧遠法師がこの運動の依りどころとされたのは『般舟三昧経』でありました。般舟は梵語プラチユトパンナで「現在」という意味です。三昧はサマーディで「心を集中すること」です。

つまり般舟三昧とは、へ仏様が現在あらわれるように心を集中させること」なのです。それでこの経は、般舟三昧によって諸仏が実際に眼前に現われることを説き（見仏）、とくに阿弥陀仏のことを説いておられるのであります。京都に般舟三昧院という天台宗の寺がありますように、天台宗でもこの法を行なうのですから、阿弥陀信仰の広さがわかるのであります。同経には、「国土において阿弥陀仏を聞いて数々念ず。この念を用うるが故に阿弥陀仏を見たてまつる。仏を見終わって、したがって問いたてまつる。当に何等の法を持して阿弥陀仏の国に生ずべきや。その時に阿弥陀仏この菩薩に語って言わく。来って我が国に生ぜんと欲せば、常に我を念ずること数々にして、常に常に念を守って休息あることなかるべし。是の如くせば来って我が国に生ずることを得ん」と説かれているのです。

ですから見仏とはいっても、その目的は極楽往生にあるのです。

白蓮社の名称については、学者の間には諸説がありますが、伝えられるところでは、二つの池に白蓮華が咲いていたので、この名がついたと言われているのです（異説もあり）。

いずれにしても、この事実は大変なことでありまして、お念仏というものが、人々の心の中にぐいぐいと食い込んでいく、その歴史的事実を知らされるのであります。インドで世親菩薩が阿弥陀仏への熱烈なる信仰告白を行ない、その信ずるところを著述された頃、中国ではすでに慧遠法師が、同志と集団で、これも熱烈なる大念仏信仰運動を展開されていたということは、重大であります。

慧遠法師の念仏は、念仏信仰の中国での見事な開花といつてよいでしょう。ですから、浄土

宗二祖聖光上人の弟子宗円上人は、師命で宋に渡った際、法師の遺跡たる廬山を訪拝して帰り、感激して自らの法名に「白蓮社」の号をつけたのでした。以来、浄土宗の坊さんは○蓮社とか△蓮社と「蓮社」のつく号を自らの法名に付することになり、これを蓮社号というのであります。不肖私は「深蓮社」の号を頂いております。

法師が熱信された『般舟三昧經』は、浄土三部經にこそ加えられてはおりませんが、善導大師なども教えの中にこの經のことを採り入れられておられるのであります（後述）。法師には三歳年下の慧持という弟がおられ、一緒に道安師の弟子になっているのですが、晩年慧持は他地に念仏を広めるため兄慧遠師と別れます。そのとき、共に西方極楽浄土で再会することを誓い合ったと伝記にあり、念仏信仰はすっかり確立していたのでした。

（函館・稱名寺住職）

暑

中

御

見

舞

総本山 知恩院

門跡 中村康隆

大本山 増上寺

法主 藤堂恭俊

大本山 金戒光明寺

法主 坪井俊映

大本山 百万遍知恩寺

法主 林 靈法

大本山 清浄華院

法主 江藤澄賢

大本山 善導寺

法主 藤堂俊章

大本山 善光寺大本願

法主 一條智光

浄土宗宗務総長

成田有恒

〒154 世田谷区世田谷四―七―九

大吉寺

大田秀三

〒370 高崎市通町九〇安国寺
慈光ビル(〇二七三)三三四〇〇〇

埼玉工業大学

松川文豪

学校法人 大乘淑徳学園
淑徳短期大学

理事長
学長 長谷川良昭

〒174 東京都板橋区前野町五―五―二

京都文教短期大学

学長 大河内良孝

〒611 宇治市慎島町千足八〇
電話(〇七七四)二一四一〇一

暑 中 御 見 舞

函館称名寺

〒040 函館市船見町一八一—一四
電話(〇二三八)二三—〇五七四

浄土宗 清岸寺

住 職 原口正弘

〒151 東京都渋谷区幡ヶ谷一三六—一
電話(〇三三)三三七—三五〇五

横浜大光院

宮林昭彦

〒030 青森市本町二—一—十二

正覚寺 楠美知行

〒112 東京都文京区小石川三—十四—六

無量山傳 通院

電話(〇三三)三八一四—三七〇一代表

鎌倉大仏殿 高德院

住 職 佐藤密雄

〒248 鎌倉市長谷四—二—二八
電話(〇四六七)二二—〇七〇三

雲上寺住職

東海林良雲

〒985 塩釜市南町一—一—一

お寺はみなさんの相談所
浄心寺

小池政雄

〒113 文京区向丘二—十七—四

檀王法林寺

信ヶ原良文

〒606 京都市左京区川端通三条上ル

大松寺

酒井亮貫

〒108 東京都港区三田四—一—三八
電話(〇三三)三四五一—二四九四

明顕山 祐天寺

住 職 本多正雄

副住職 巖谷勝正

〒153 東京都目黒区中目黒五—二四—五三
電話(〇三三)三七二—〇八一九

法然上人御降誕地廿五霊場第一番
中国三十三観音特別霊場

誕生寺

〒709 岡山県久米郡久米南町里方八〇八
電話(〇八六七)二八—二二〇二



● 初めからお詫びを申しあげます。今号は、本来なら七月号のところ、七、八月合併号とさせていただきます。理由は、どうしても一か月先付の雑誌にしたかったからであります。つまり、九月号を八月中に発行してお手元に届けるといった形で、以下、毎月、十月号は九月に発行する具合に順送りと相成ります。このことは雑誌制作の進行の問題でありますが、印刷所に今まで以上の負担をかけるわけにも参りませんので、いろいろ協議の上で踏み切らせていただきました。これによるメリットは、より広く会員を募るのに役立つということであります。しかし、とはいいいながら単に月号表示だけのことはあいすみません。ことに六月八日の総会では合併号発行はやめてほしいとの発言があったばかりでありました。ただ汗顔叩頭するのみであります。事情何とぞご憐察の上、皆さまのご寛恕をお願いする次第であります。

● ご好評のうちに連載いたしました高橋富雄氏の「念仏信仰と武士道」が本号を以て終了いたしました。代わって、本号より須藤隆仙師の「念仏信仰の系譜Ⅱ中国編Ⅱ」が始まります。先のインド編に続く労作となりますのでご期

待ください。

● NHK教育テレビでも好評の太正大学教授石上善應師から「観無量寿経の世界」の玉稿を頂戴いたしました。これもぜひご味読くだされば幸いです。

● 話が前後いたしました。本号より奥付、及び表紙に表示する本誌の頒価を六百元に訂正し、合わせて年会費六千円を明記いたしました。ちなみに、法然上人鑽仰会の一一般会費が年額六千円であり、一般会員には本誌を送呈するといった規約をお伝えするためのものであります。従来、頒価五百円であったのが六百元に変わったのは、この春の郵便料金改訂に伴うものであります。なお、会費イコール年間の誌代だと誤解されませんよう、くれぐれもお願いを申しあげたいと思います。

● この号がお手元に届く頃は盛夏になつていることでしょう。暑中、ご自愛のほどを心よりお祈りいたします。

(編集チーフ) 小川有順

編集スタッフ 栗田順一

齋藤晃道

長谷川岱潤

村田洋一

太田正孝

石上俊教

編集室

●お知らせ

本誌をまとめて購入希望の方は、一〇部以上を単位に法然上人鑽仰会までお問い合わせください。頒価その他について詳しくご説明申しあげます。なお、四月号以降の分も残部が少々ございます。

●お願い

本誌「浄土」への投稿は随時受けつけております。ただし、採否に関しては編集部にご一任ください。また、原稿は原方とは必ずコピーをお取りの上お送りください。なお、採用させていただいた分には規定の稿料を進呈いたします。そのほか、ご意見、ご希望がありましたらご遠慮なくお寄せください。特に締切日は設けておりません。

編集部

浄土

六十巻 七、八月合併号 頒価六百元
年金費六千円

昭和十年五月二十日第三種郵便物認可

印刷 平成六年七月二十五日

発行 平成六年八月一日

編集人 宮林昭彦

発行人 牧田諦彦

印刷所 株式会社 文化カラー印刷

写真植字 文化フォトタイプ

〒一〇五東京都港区芝公園四七四明照会館内

発行所 法然上人鑽仰会

電話 〇三(三三七八)六九四七

FAX 〇三(三三七八)七〇三六



SAPPORO

私たちは味わい・ライフを追求します。

うまい、うまいで、カロリー半分。 自信作〈カロリーハーフ〉



サッポロ生ビール カロリーハーフ

飲酒は20歳をすぎから

●ご協力のお願ひ：自動販売機による酒類の販売は、午後11時から午前5時まで停止されています。

サッポロビール株式会社

LIFE TOGETHER



人間のやさしさをクルマに。

スピードおさえて、いい運転。シートベルトをしめましょう。

姿と、かたち。



これが、新しいセドリック

高級車を国産最大の基準は、その姿とかたちである。
つくり手の強い意志が感じられる姿と、それを忠実に具現化した正統のフォルム。すなわち、かたちである。
まず、姿がいい。かたちがいい。新しいセドリックを見てほしい。

Cedric

日産のかたちを見てください。 PHOTO: セドリックV30 ツインカムターボ プロアム

主な装備 ● VG30DET (V6 ツインカムターボ・総排気量 2960cc) エンジン ● 最高出力 255PS/6000rpm (※NET値) ● 最大トルク 35.0kgm/3200rpm ● フルレンジ電子制御4速オートマチック (E-AT) (※NET値) とは、エンジンを車両に搭載した状態とほぼ同等条件で測定したものです。日産自動車株式会社お客様相談室 ● 全国共通フリーダイヤル 0120-315-232 お近くのローレル販売会社へ。